

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(47)

主要地方道竜郷・新奄美空港線改良事業に伴う埋蔵文化財報告書

# 土浜ヤ一ヤ遺跡

1988年3月

鹿児島県教育委員会

---



航 空 写 真



土 浜 ヤ ー ヤ 遺 跡 遠 景



土 層 図



磨 製 石 器

## 序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が、主要地方道竜郷・新奄美空港線改良工事に伴って昭和62年度に実施した土浜ヤーヤ遺跡の発掘調査の記録です。

土浜ヤーヤ遺跡は、奄美大島本島の内陸部に所在する遺跡で、今回約4 か月をかけて実施した調査の結果、奄美諸島では初めての旧石器時代の遺跡であることが確認されました。また、旧石器時代ではまれな磨製石器をはじめ、数種の石器類も出土しています。

本書は、南西諸島の先史時代の解明に貴重な手がかりを提供するものと考えます。地域の歴史研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部道路建設課、大島支庁、笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和63年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 濱 里 忠 宣

## 例 言

1. この報告書は主要地方道竜郷・新奄美空港線改良事業に伴う土浜<sup>つちばま</sup>ヤーヤ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部道路建設課の依頼で鹿児島県教育委員会が行った。
3. 本遺跡調査においては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、鹿児島市立玉竜高校教諭成尾英仁氏の指導助言を得、成尾氏には玉稿をたまわった。
4. 放射性炭素測定については京都産業大学、山田治氏に依頼した。
5. 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
6. 本書で用いた挿図中の通し番号は、図版中の番号と同一である。
7. 本書の執筆及び編集は、旭・牛ノ浜が行った。

# 目 次

序 文	
例 言	
第1章 遺跡の位置及び自然環境	10
第2章 遺跡周辺の史的環境	11
第3章 調査の経過	20
第1節 調査に至るまでの経過	20
第2節 調査の組織	20
第3節 調査の経過	20
第4章 層 序	23
第5章 調査の概要	33
第1節 調査の概要	33
第2節 A地点の調査	34
1. 旧石器時代	34
2. 表層の遺物	40
第3節 B地点の調査	42
1. 縄文時代	43
2. 表層の遺物	44
第4節 C地点の調査	45
1. 旧石器時代	45
2. 縄文時代	45
3. 表層の遺物	47
第6章 ま と め	48
第7章 土浜ヤーヤ遺跡の地層について	71

## 挿 図 目 次

第1図	土浜ヤーヤ遺跡と周辺遺跡	15
第2図	土浜ヤーヤ遺跡周辺の地形図	19
第3図	土層模式柱状図	23
第4図	土層断面図(13・14・15・21トレンチ)	24
第5図	土層断面図(22・24・26・27トレンチ)	25
第6図	土層断面図(28・30・31・33トレンチ)	26
第7図	土層断面図(A地点・B地点)	27
第8図	土層断面図(C地点)	29
第9図	トレンチ配置図	31
第10図	A地点Ⅲb層出土の石器	34
第11図	A地点遺物出土状況	35
第12図	A地点Ⅲc層出土の石器(1)	36
第13図	A地点Ⅲc層出土の石器(2)	37
第14図	A地点Ⅲc層出土の石器(3)	38
第15図	A地点表層出土の遺物(土器)	40
第16図	A地点表層出土の遺物(陶磁器)	41
第17図	B地点遺物出土状況	42
第18図	B地点Ⅱ層出土の打製石鏃	43
第19図	B地点Ⅱ層出土の磨製石斧	44
第20図	B地点表層出土の遺物	44
第21図	C地点Ⅲb層出土の石器	45
第22図	C地点遺物出土状況	46
第23図	C地点Ⅱ層出土の石器	47
第24図	C地点表層出土の遺物	47

## 表 目 次

第1表	土浜ヤーヤ遺跡と周辺遺跡	17
第2表	A地点出土石器計測表	39

## 図 版 目 次

図版1	遺跡遠景（南から）・調査風景	51
図版2	確認調査風景・確認調査（13トレンチ）	52
図版3	A地点全景・A地点調査風景	53
図版4	土層（A地点C-3・4区北側断面，C-3区東側断面）	54
図版5	A地点Ⅲc層遺物出土状況	55
図版6	A地点Ⅲc層遺物出土状況（No.7，No.14）	56
図版7	A地点Ⅲc層遺物出土状況（No.10，No.13）	57
図版8	A地点Ⅲb層出土石器	58
図版9	A地点Ⅲc層出土石器	59
図版10	A地点Ⅲc層出土石器	60
図版11	A地点Ⅲc層出土石器・磨製石器（拡大）	61
図版12	A地点表層出土の遺物	62
図版13	B地点調査風景・土層（B地点C-13区北側断面）	63
図版14	土層（B地点C-13区東側断面）・B地点Ⅱ層土器出土状況	64
図版15	B地点Ⅱ層石器出土状況（打製石鏃・磨製石斧）	65
図版16	B地点Ⅱ層出土土器・B地点Ⅱ層出土石器・B地点表層出土の遺物	66
図版17	C地点調査風景・土層（C地点C-17区東側断面）	67
図版18	C地点Ⅱ層石器出土状況（磨製石斧）・C地点Ⅲb層出土石器	68
図版19	C地点Ⅱ層出土土器，石器・C地点表層出土の遺物	69
図版20	節田小学校児童体験学習・調査メンバー	70



赤尾木上空



## 第 1 章 遺跡の位置及び自然環境

土浜ヤーヤ遺跡は鹿児島県大島郡笠利町土浜に所在する。本遺跡のある笠利町は赤尾木地峡部以東に位置し、南北約15km、東西約4.5 kmの細長い半島である。この半島の中央部には、高岳（183.6 m）、淀岳（175 m）、大刈山（180.7 m）等が南北に走り、丘陵性の小起伏山地及び台地を形成し、東西の海岸地帯を分断している。半島の西海岸は沈降して溺れ谷の様相を呈し山脚は急傾斜をなして海に没している。海岸線は割合に複雑であるが、リアス湾頭の低地部では河川堆積物によって三角州や谷底平野が形成され、ここに屋仁・佐仁・赤尾木・手花部・喜瀬などの集落が立地している。東海岸は、海岸段丘が発達し標高数10 mの緩やかな丘陵状の台地を形成している。また、低位の隆起珊瑚礁面には砂丘が発達し、その背後に集落が多く形成されている。東海岸一帯に広がる砂丘は、台地裾野に形成された旧砂丘と現海岸線を形成する新砂丘に区分される。内陸部の台地裾野に形成された旧砂丘上には、宇宿貝塚・宇宿高又遺跡・宇宿小学校遺跡・下山田遺跡・ケジ遺跡・長浜第Ⅱ遺跡などの縄文時代の遺跡が立地し、海岸側の新砂丘上には、長浜第Ⅰ遺跡・泉川遺跡などの古墳時代から奈良・平安時代の遺跡が立地している。また、この旧砂丘と新砂丘の間に長浜第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、宇宿港遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在しており、砂丘の形成とともに生活域が変化しているようすを伺い知ることができる。

地質についてみると、東海岸では須野集落から節田集落にかけて砂岩及びリズミカルな砂岩頁岩互層を主体とする古第三系の和野層が発達している。半島中央部から西海岸にかけては、千枚岩・粘板岩及び砂岩粘板岩互層を主体とする古生代～中生代の名瀬層が和野層と断層でせって広く分布している。また、明神崎から赤木名にかけて南北方向に幅約600 m、長さ約2.5 kmでカコウ岩が名瀬層に調和して貫入している。明神崎以西では、名瀬層に峡在された緑色塩基性火成岩類や枕状溶岩の露頭もみられる。

土浜ヤーヤ遺跡は、土浜集落を南流する後川によって開析された標高約16～18 mの海岸段丘上の遺跡で、昭和38年に発掘調査が行われたヤーヤ洞穴の南方約150 mに位置している。遺跡の立地する段丘面は南側に緩やかに傾斜し砂丘へと続いている。土浜集落の殆どは遺跡南方及び東方の砂丘上に集中しているが、集落内にも土浜遺跡をはじめ遺物の散布がみられる。遺跡の西側には明神崎から赤木名にかけて名瀬層に貫入したカコウ岩体が小起伏山地をなして迫っている。カコウ岩は、優白色の中粒の鉱物からなるが風化作用が進み周辺部はマサ土化し、新鮮な部分は礫状に散在している。カコウ岩体の周辺には千枚岩・粘板岩及び砂岩粘板岩互層を主体とする名瀬層の露頭がみられるが、カコウ岩体の貫入による攪乱をうけ走向傾斜が著しく乱れている。遺跡の基盤岩はカコウ岩と名瀬層の接触部にあたり、粘板岩・頁岩などは一部でホルンフェルス化している。遺跡内から出土するカコウ岩はこの基盤岩が風化したものであり、石器の石材として用いられているものも接触熱変成によって鉱化作用をうけた頁岩が主である。

## 第 2 章 遺跡周辺の史的環境

南西諸島の中でもここ笠利町は遺跡の多いところで知られている。また、遺跡の調査も奄美本島では一番早く調査された所として有名である。発掘調査が実施されたものも少なくない。そこで周辺地域とあわせて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

奄美大島で考古学の記録が最初にあられるのは、1982年（明治25）若林勝邦による「種子島及大島の石斧」に始まる。その後、昭和の初期に徳之島で広瀬祐良、小原一夫等が調査を行った。<sup>註1</sup> 奄美大島での最初の発掘は、笠利町の宇宿貝塚であった。

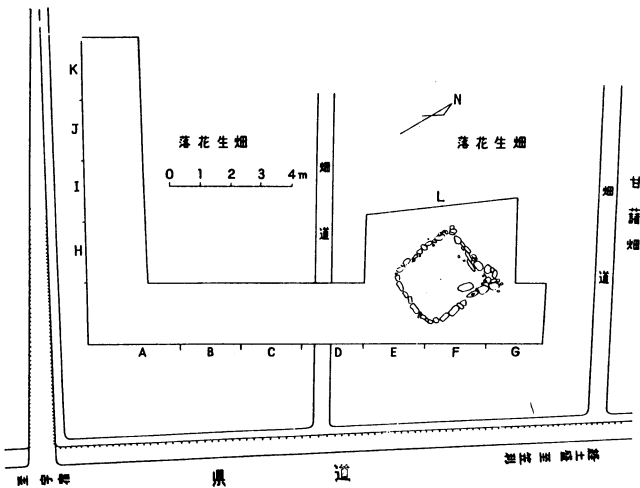
宇宿貝塚は、昭和8年12月17日、三宅宗悦によって発見され、1941年、「人類学先史学講座16」に「南島の先史時代」という題で発表されている。それによると、「当時、県道の開削によって貝塚の中央部が約3mの深さで切られ、貝層が露出していた。貝層は西側に殊に著明であるが、貝量は割合に少く、この部では地表から1.5mが砂層、以下1.8m迄は貝層が見られ、土器の包含量は中等、長さは県道の掘割で検すると、南北約50間（90m）に及び、相当大的な貝塚と思われる。12月20日改めて、この貝塚の一部（前記貝層露出の中央部の西方約2mの芋畑中）を試掘して見たが、この部では表土より60cmが砂層で、以下黒土層となり、7個の焼石が不規則に並んで発見された。貝量は少なく、遺物の包含も乏しいが、獣骨、魚骨等が出た」と記載され、宇宿フカミチ貝塚として報告されている。

その後、しばらく調査がなされず、昭和29年5月に河口貞徳が南日本新聞社と鹿児島大学の主催による奄美大島学術調査団に参加して、奄美諸島全域にわたって調査した。<sup>註2</sup> この際、宇宿

貝塚を試掘（2m×2mのトレンチ）を行い、二種類の土器が層位的にも差のあることが認められたが、時間不足のため完掘することが出来ず、再度確認調査を必要とした。

奄美大島学術調査団の調査に続いて、九学会連合奄美大島共同調査委員会によって昭和30年7月から8月まで国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義麿によって初めて本格的な発掘調査が行われた。<sup>註3</sup>

その結果、出土土器を三種に分けることが出来、層位的にも差異のあることが確認で



昭和30年調査発掘区と住居跡

九学会連合刊「奄美—その自然と文化」より

きた。宇宿上層式、宇宿下層式土器に分け、その間に中間形態があると記している。以前また、宇宿上層式の時期の石組住居跡が検出されている。

九学会による調査によって、漠然としていた南島の先史時代の編年に一つの基準が与えられ、本土の先史時代との結びつきが明らかになり、南島先史時代の編年の基本になった。

その後、また、九学会では宇宿貝塚周辺の遺跡も同時に表面採集による遺跡調査をしている。宇宿小学校農場遺跡と宇宿小学校校庭、ナビロ川沿岸の遺跡である。

その後、1963年（昭38）熊本日日新聞による熊日南島学術調査団が組織され、永井昌文、三島格氏<sup>註4</sup>によって、土浜ヤーヤ洞穴の調査がなされている。ヤーヤ洞穴は昭和8年、三宅宗悦氏



によって踏査された遺跡である。その記録によると『榕樹、クバ、推木の亜熱帯の植物が徒づらに生え茂って物凄い感じを与える。洞窟の天井がずっと昔に落ちたと見るべきもので鐘乳石の下った崖下に夥しい人骨が散乱している。雨にうたれる事もあると見えて苔蒸したのものもある。

骨掘り専門でなければ鬼気迫るの一語で逃げ出す所だ。それ程イヤヤは陰惨だった。恐らく笠利

ヤーヤ洞穴

村の葬制でもここが古式なためかも知れない。桧材の木棺の破片が散らばっている。約6例の人骨を集めた<sup>註5</sup>』とある。昭和38年の調査によると3 m×1 mのトレンチを洞穴中央部に設定し調査を行っている。その結果2層に分れ、第1層から沈線文土器、条痕文土器、無文土器凹文帯土器、第2層から凹文帯土器、条痕文土器、沈線文土器、刺突文土器、刺突沈線爪形文土器、磨製石斧、貝輪、螺蓋製貝斧、貝匙等が出土している。また、この時出土した爪形文土器は、沖縄で調査された渡具地東原遺跡<sup>註6</sup>と同類であると判断され、奄美の歴史は6000年前までさか上ることが判明した。

昭和49年、河口貞徳氏は瀬戸内町喜徳遺跡<sup>註7</sup>を発掘調査し、その出土遺物を参考にして、宇宿下層式土器と一括されていた土器の編年にとりかかった。この成果によって奄美の土器が細分化<sup>註8</sup>されてきた。

昭和50年代にはいと地元研究者によって「奄美考古学研究会」が組織され、また熊本大学教授白木原和美氏のゼネラルサーベイ等によって遺跡、遺物の新発見が相次いでくる。サウチ遺跡もその一つであった。昭和50年9月、中山清美氏によって発見されている。その後、砂の採掘がなされ、笠利町教育委員会は昭和52年8月緊急発掘を行った。その結果 奄美大島および沖縄諸島で最初の弥生遺跡<sup>註9</sup>であることが判明した。面縄西洞式土器を最下層、弥生前期、中

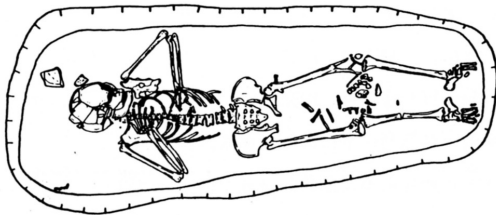


サウチ遺跡遠景

期を中層、弥生後期を上層から、それぞれ間層を隔って出土した。その他遺構として紡錘車を出した竪穴住居跡、貝輪を納めた土壇等が検出され、遺物も土器以外では石斧、石錘、磨石、磨製石鏃、貝匙等が出土した。また、同年7月には、熊本大学考古学研究室と奄美考古学会によって宇宿高又遺跡<sup>註10</sup>が発掘調査された。その結果、曾畑系土器、ヤブチ式土器、面縄前庭式土器、条痕文土器、宇宿上層

式土器が出土した。曾畑系土器の出土した層位の放射性炭素測定結果は4,450±90 Y. B. P. が与えられた。また遺構として、炉跡やピットが検出された。

翌年53年には、笠利町教育委員会が、国及び県の補助事業として、宇宿貝塚の国指定に伴う



人骨出土状況

笠利町教育委員会刊「宇宿貝塚」より

発掘調査を行った。<sup>註11</sup>その結果、宇宿上層式、面縄東洞式、市来式、嘉徳式、面縄西洞式土器、石斧、磨石等の石器、貝製品、骨角器と多くの遺物が出土し、埋葬遺構が検出された。袋状土壇に母子の遺体を合葬したもので、母体の頸にはガラス製丸玉2、小玉40、骨製管玉4 が取りまいていた。

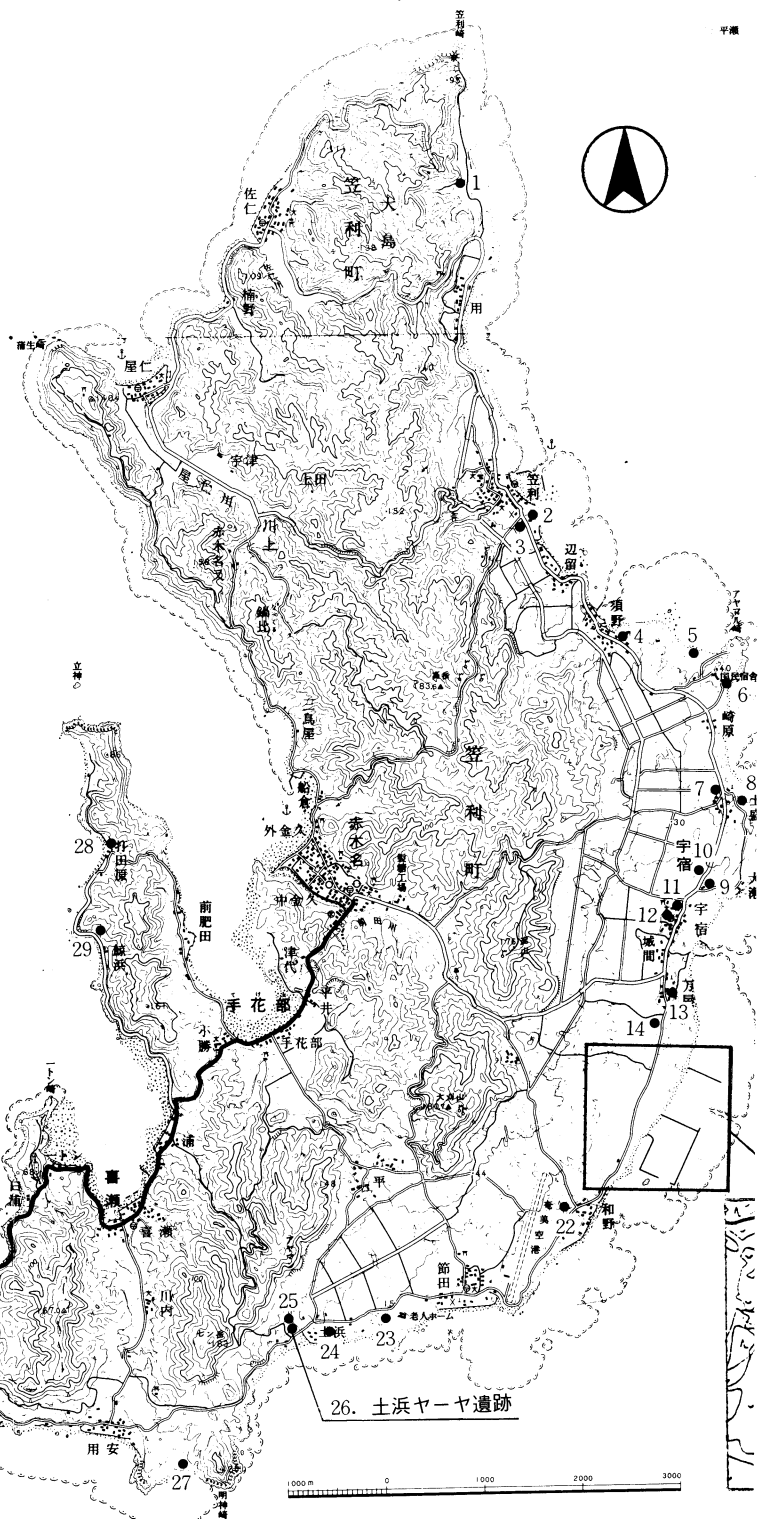
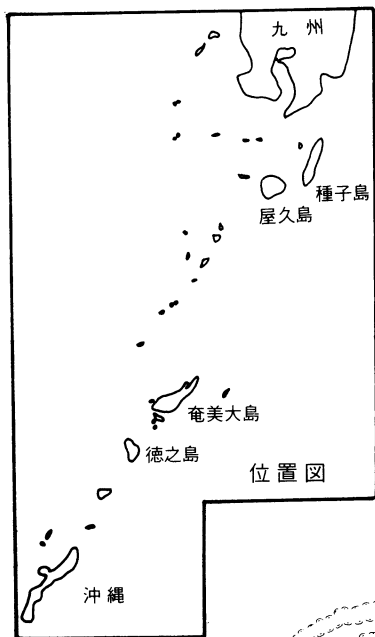
また、熊本大学考古学研究室に積極的に奄美諸島の調査を手がけ、昭和55年、宇宿港遺跡<sup>註12</sup>、57年、ケジ遺跡<sup>註13</sup>、コビロ遺跡<sup>註13</sup>、辺留窪遺跡<sup>註13</sup>の調査を行い成果をあげている。58年には笠利町教育委員会であやまる第2貝塚の調査を行った。<sup>註14</sup>その結果、南九州本土系の弥生土器、土師器が出土し、九州本土との交流をうかがわせる資料が得られている。

昭和58年以降、新奄美空港建設に伴い万屋一和野地区において長浜金久第I・II遺跡<sup>註15</sup>（昭和58年・62年）、下山田II遺跡<sup>註16</sup>（昭和59年）、ケジI・III遺跡<sup>註17</sup>（昭和60年）、泉川遺跡<sup>註18</sup>（昭和60年）、長浜金久第III・IV・V遺跡<sup>註19</sup>（昭和61年）などの調査が行われた。長浜金久第I遺跡は兼久式土器を主体とする古墳時代～奈良・平安時代の遺跡で、夜光貝製の貝匙・容器・螺蓋製貝斧、貝札などの多量の貝製品、へら状の鉄製品、鉄製釣り針などが出土している。長浜金久第II遺跡は嘉徳式土器を主体とする縄文後期の遺跡で、住居跡・炉跡・集石・土壇などの遺構やオオッタノハ製の貝輪・夜光貝製の匙などの貝製品、有溝砥石などが出土している。下山田II遺跡は台地裾野に形成された旧砂丘上の遺跡である。面縄前庭式・嘉徳式土器を主体とする縄文

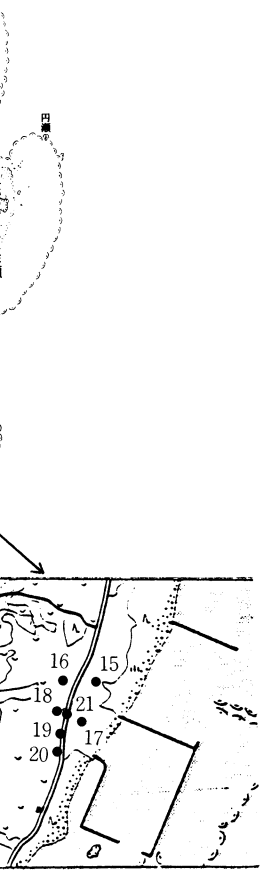
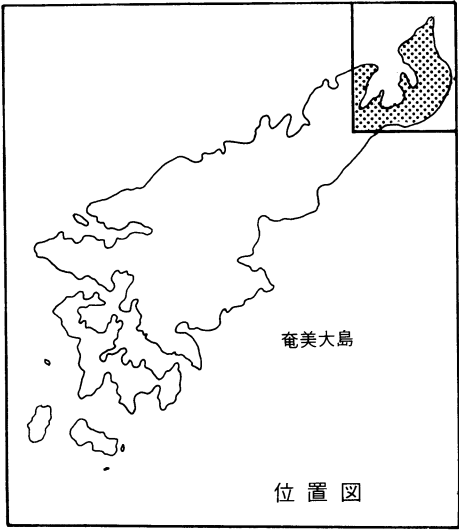
後期の遺跡で、貝輪などの貝製品、骨製品が多量に出土している。ケジⅠ・Ⅲ遺跡も旧砂丘上の遺跡であるが、上下2層の文化層が確認されている。下層からは縄文前期の曾畑系の土器、上層からは縄文後期の面縄前庭式土器のほか集石遺構も確認されている。泉川遺跡は長浜金久第Ⅰ遺跡と同じ海岸沿いの新砂丘上にある古墳時代～奈良・平安時代の遺跡で、兼久式土器を主体として土師器、須恵器も出土している。土師器には靱痕のある土器片も確認されている。長浜金久第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡は第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の中間的位置にある弥生時代～古墳時代の遺跡である。山ノ口式系統の土器のほか成川式土器、免田式土器、夜光貝製の鎌などが出土している。新奄美空港建設に伴うこれらの調査により、東海岸における砂丘の形成と生活域の関連をさぐるうえで重要な手がかりが得られた。

このように、奄美大島の中でも笠利町は他地域に比べ、学史的にも、また遺跡の数にしても多いことで知られている。これは奄美大島の地形によるもので、島の南部が山岳地帯で海岸まで狭まっているのに対し、笠利町特に東海岸は、海岸段丘が発達し、また砂丘が発達している等自然環境に恵まれ、古代の人々の生活の場となったのであろう。

- 註1 昭和5年夏、広瀬祐良氏が同年秋に小原一夫氏が面縄第1貝塚を調査した。  
 広瀬祐良『昭和8年度調査 郷土史研究 徳ノ島ノ部』 1933  
 小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」 史前学雑誌第4巻3・4号 1932
- 註2 三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学先史学講座16』 雄山閣 1941
- 註3 河口貞徳「南島先史時代」南方産業科学研究所報告第1巻2号 1956
- 註4 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」  
 『奄美—自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会 1959
- 註5 永井昌文・三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」考古学雑誌50巻2号 1974
- 註6 高宮廣衛・知念勇他「渡具知東原」 読谷村文化財調査報告第3集 1977
- 註7 河口貞徳・上村俊雄他「嘉徳遺跡」 鹿児島考古10 1974
- 註8 河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」 鹿児島考古9 1974
- 註9 河口貞徳・出口浩・本田道輝「サウチ遺跡」 笠利町文化財調査報告書 1978
- 註10 中山清美他「高又遺跡」 笠利町文化財調査報告書 1978
- 註11 河口貞徳・出口浩・本田道輝「宇宿貝塚」 笠利町文化財調査報告書 1979
- 註12 熊本大学考古学研究室「宇宿港遺跡」 笠利町文化財調査報告書4 1981
- 註13 熊本大学考古学研究室「ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡」 笠利町文化財調査報告書5 1983
- 註14 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」 笠利町文化財調査報告書7 1984
- 註15 鹿児島教育委員会「長浜金久遺跡Ⅱ」 鹿児島県埋蔵文化財報告書32 1985
- 註16 鹿児島県教育委員会「下山田Ⅱ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書45 1988
- 註17 鹿児島県教育委員会「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書38 1986
- 註18 鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書39 1986
- 註19 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書42 1987



第1図 土浜ヤーヤ遺跡の位置と周辺遺跡



第1表 土浜ヤーヤ遺跡と周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時期	備考	文献
1	用長浜遺跡	笠利町用字長浜	古墳	石器, 貝殻, 兼久式	①
2	辺留城遺跡	〃 辺留城	〃	青磁, 類須恵器	②
3	辺留窪遺跡	〃 辺留窪	〃	石器, 兼久式, 青磁	⑫
4	コピロ遺跡	〃 須野コピロ			⑫
5	あやまる第2貝塚	〃 須野字大道	弥生	石器, 弥生系土器	③
6	あやまる第1貝塚	〃 須野字崎原		類須恵器	①
7	喜子川遺跡	〃 喜子川	縄文	爪形文, 曾畑式	②
8	土盛遺跡	〃 土盛		兼久式, 骨角器	②
9	宇宿港遺跡	〃 宇宿字港	弥生	弥生式, 貝殻, 人骨	④
10	宇宿貝塚	〃 宇宿字大道	縄文・弥生	住居跡, 人骨, 市来式, 面縄東洞式, 石器	①⑤⑥⑦⑧
11	宇宿高又遺跡	〃 宇宿字高又	縄文	条痕文, 曾畑式	⑨
12	宇宿小学校遺跡	〃 宇宿	〃	宇宿下層式	⑦
13	万屋遺跡	〃 万屋		貝殻, 兼久式	②
14	下山田遺跡	〃 万屋字下山田	〃	宇宿下層式, 面縄前庭式	⑩
15	泉川遺跡	〃 万屋字長浜	奈良・平安	貝殻, 兼久式	⑪
16	ケジ遺跡(ケジI・II・III) 遺跡名七	〃 万屋字ケジ	縄文	宇宿下層式, 条痕文	⑫⑬
17	長浜金久第I遺跡	〃 和野字長浜	奈良・平安	兼久式, 石器, 貝殻, 人骨	⑭⑮
18	長浜金久第II遺跡	〃 〃	縄文	嘉徳式, 石器, 貝殻	⑭⑮
19	長浜金久III遺跡	〃 〃	弥生~古墳	土器, 石器, 貝殻, 人骨	⑯
20	長浜金久VI遺跡	〃 〃	弥生	土器, 石器, 貝殻, 人骨	⑯
21	長浜金久V遺跡	〃 〃	〃	土器, 石器, 貝殻, 人骨	⑯
22	ナピロ川遺跡	〃 和野字ナピロ川		兼久式, 石器	⑦
23	立神遺跡	〃 節田		兼久式, 石器, 貝殻, 人骨	②
24	土浜遺跡	〃 土浜	縄文	兼久式, 石器, 貝殻, 人骨	中山氏教示
25	ヤーヤ洞穴	〃 〃	〃	爪形文, 弥生系土器	⑰
26	土浜ヤーヤ遺跡	〃 〃	旧石器・縄文	旧石器時代石器, 石斧, 石鏃	本文
27	明神崎遺跡	〃 用安字入瀬	弥生	弥生系土器, 貝殻	②
28	サウチ遺跡	〃 喜瀬字サウチ	縄文・弥生	住居跡, 人骨, 面縄西洞式, 弥生土器, 貝符	⑱
29	鯨浜遺跡	〃 鯨浜		類須恵器	②
30	ウフタ遺跡	龍郷町赤尾木1, 328-8	〃	条痕文, 面縄前庭式, 嘉徳II式, 面縄西洞式, 夜戸式, 石斧, 石鏃	⑳
31	赤尾木保育所遺跡	〃 赤尾木232-1		類須恵器, 兼久式	⑲
32	ウギヤウ遺跡	〃 〃 1,399	縄文	面縄西洞式, 磨製石斧	⑲
33	手広遺跡	〃 〃 1,730	縄文・弥生	石組遺構, 嘉徳I・II式, 宇宿上層式, 石器, 貝製品	㉑
34	瀬連遺跡	〃 芦徳979	縄文	面縄西洞式土器	⑲
35	フージャバル遺跡	〃 浦字上天川21-1		宇宿上層式土器	⑲
36	龍郷金久遺跡	〃 龍郷		兼久式, 類須恵器	⑲
37	前間遺跡	〃 龍郷124		土器片, 貝殻	⑲
38	白間遺跡	〃 〃 172	15世紀	青磁片	⑲
39	中里遺跡	〃 〃 1,548		土器片, 貝殻	⑲
40	外金久遺跡	〃 安木屋場2,459		土器片, 貝殻	⑲
41	三岸遺跡	〃 〃 2,808		面縄西洞式土器	⑲

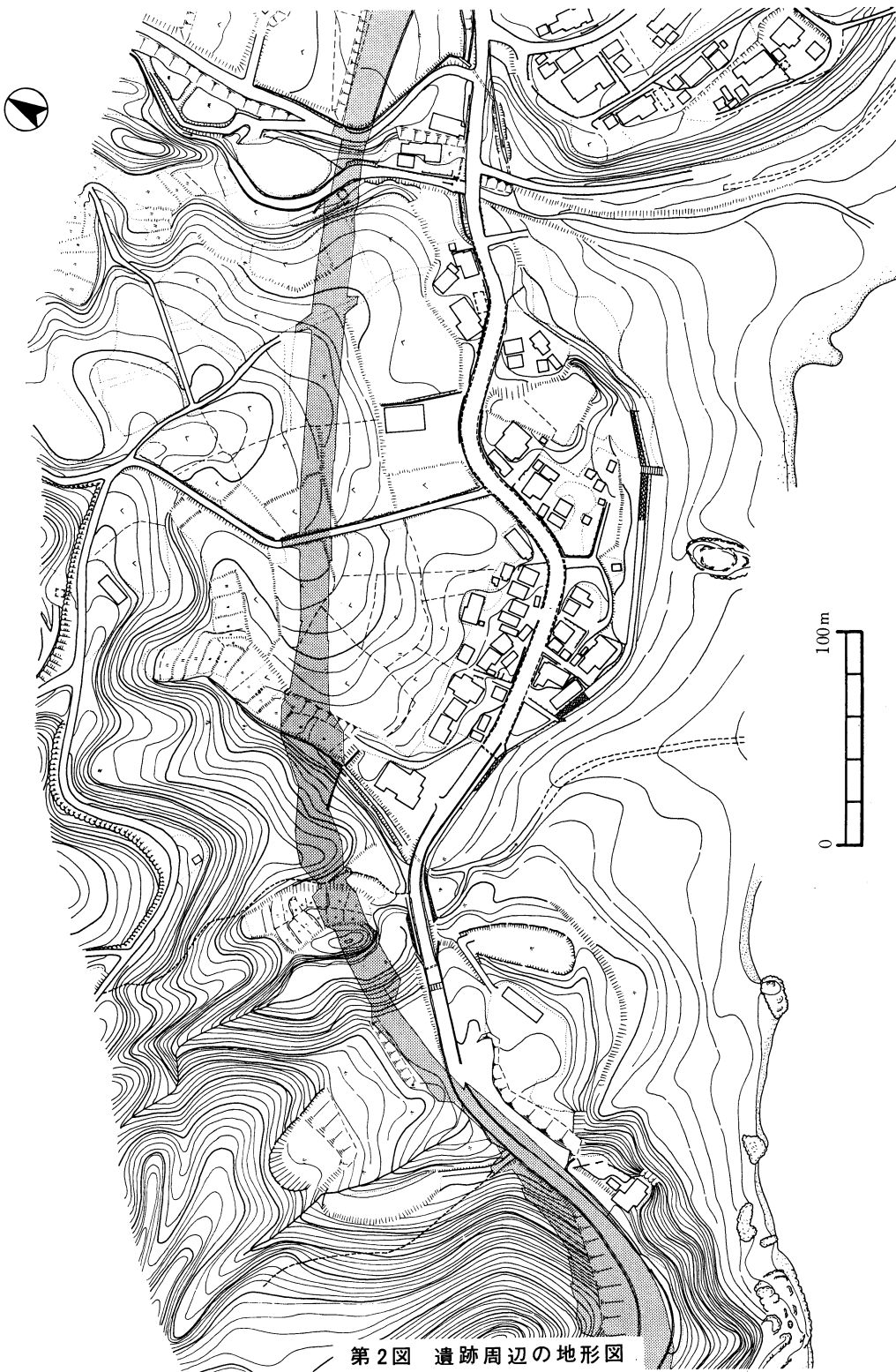


文 献

- ① 『笠利町郷土誌』 笠利町
- ② 中山清美「奄美大島の先史遺跡」 南島史学17, 18
- ③ 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」 笠利町文化財調査報告7 1984
- ④ 熊本大学「宇宿港遺跡」 笠利町文化財調査報告4 1981
- ⑤ 三宅宗悦「南島の先史時代」 「人類学先史学講座16」 雄山閣 1941
- ⑥ 河口貞徳「南島先史時代」 南方産業科学研究所報告第1巻2号 1956
- ⑦ 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」  
『奄美・自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会 1959
- ⑧ 笠利町教育委員会「宇宿貝塚」 笠利町文化財調査報告書 1979
- ⑨ 中山清美・阿倍克子・紫尾俊介・中村愿「高又遺跡」 1978
- ⑩ 笠利町教育委員会「城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡」 笠利町文化財調査報告8 1986
- ⑪ 鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書39 1986
- ⑫ 笠利町教育委員会「ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡」 笠利町文化財調査報告書5 1983
- ⑬ 鹿児島県教育委員会「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書38 1986
- ⑭ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書31 1984
- ⑮ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡Ⅱ」 鹿児島県埋蔵文化財報告書32 1985
- ⑯ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書42 1987
- ⑰ 永井昌文・三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査報告」 考古学雑誌50巻2号 1974
- ⑱ 河口貞徳・出口浩・本田道輝「サウチ遺跡」 笠利町文化財調査報告書 1978
- ⑲ 龍郷町教育委員会「龍郷町の埋蔵文化財」 龍郷町文化財調査報告書 1986
- ⑳ 龍郷町教育委員会「ウフタ遺跡」 龍郷町文化財調査報告書 1982
- ㉑ 龍郷町教育委員会「手広遺跡」 1984



サウチ遺跡上空より新空港を望む



第2図 遺跡周辺の地形図

## 第 3 章 調査の経過

### 第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は新奄美空港建設に伴い、主要地方道竜郷・新奄美空港線改良工事を計画したところ、その計画用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地(土浜ヤーヤ遺跡)が存在することが判明し、県土木部と県教育委員会文化課はその取り扱いについて協議を重ねた。協議の結果、本遺跡については全面発掘調査を実施して記録による保存を行うこととなり、今回の調査が行われた。

### 第 2 節 調査の組織

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体者	鹿児島県教育委員会 教 育 長 濱里忠宣
調査責任者	“ 文化課 課長 吉井浩一
	“ 課長補佐 川畑栄造
	“ 主 幹 森田 齋
調査企画	“ 主任文化財研究員
	兼埋蔵文化財係長 立園多賀生
調査者	“ 文化財研究員 旭慶男
	“ 主 査 牛ノ浜 修
	“ 主 事 井ノ上秀文
	“ 主 事 宮田栄二
事務担当	“ 企画助成係長 濱松 巖
	“ 主 査 京田秀允
	“ 主 事 川畑由紀子

なお、発掘調査事務については大島支庁土木課総務係長 叶 義磨、主査 梶原豊光が担当した。

発掘調査にあたっては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、鹿児島市立玉龍高等学校教諭成尾英仁氏の指導を得、笠利町喜志川遺跡を調査中の沖縄国際大学学長高宮廣衛氏、熊本大学教授白木原和美氏には現地で助言をいただいた。また、群馬大学教授新井房夫氏には火山ガラスの屈折率測定を行っていただいた。

その他、鹿児島県大島支庁土木課、大島教育事務局、笠利町教育委員会の方々の協力を得た。感謝の意を表したい。

### 第 3 節 調査の経過 (日誌抄)

昭和61年4月20日から8月15日まで発掘調査を行い、その後整理作業及び報告書作成を行った。

4月20日(月)～4月25日(土)

各関係機関との事務連絡及び打合せ。発掘器材運搬。発掘調査開始。調査区域内の樹木伐採。グリッド設定(道路センターラインを基準として10m方眼を組み、西～東へA・B・C…、南～北へ1・2・3…とした)。各グリッドに2m×4mの試掘トレンチを設定(計33ヶ所)。1T(B-2区)、3T(C-3区)、4T(B-4区)、6T(C-5区)、8T(B-9区)、9T(B-10区)掘下げ。C-2区のカコウ岩の石組(径約4m、高さ約2m)清掃。写真撮影。

4月27日(月)～5月2日(土)

3T・9T掘下げ。3TⅢ層暗褐色粘質土より頁岩製の剥片数点出土。10T(B-11区)13T(C-14区)、14T(B-15区)設定、掘下げ。C-2区のカコウ岩の石組は、ハーフカットで調査の結果、自然礫の露頭と判明。自然礫の間に耕作時に集められたと思われる土器片、陶磁器片が混入していた。4月27日・28日吉井文化課課長、立園埋蔵文化財係長遺跡調査指導のため来跡。

5月11日(月)～5月16日(土)

3TⅢ層出土の頁岩製剥片の写真撮影。13T・14T掘下げ。14Tの一部に深い攪乱跡が見られるが、層序は割合に安定している。15T(C-16区)、16・18T(C-17区)、17T(B-17区)、19T(B-18区)、20・21T(C-18区)設定、掘下げ。20TⅢb層下部より拳大～人頭大のカコウ岩礫の集中がみられた。

5月18日(月)～5月23日(土)

13T・15T・16T・17T・18T・19T・20T・21T掘下げ。完掘状況写真撮影。13T・15TⅢb層暗褐色粘質土層より木炭片出土。22T(B-19区)、23T(C-19区)、24・25・26T(C-20区)、27・28T(C-21区)設定、掘下げ。

5月25日(月)～5月30日(土)

22～28T掘下げ。出土遺物なし。完掘状況写真撮影。29T・30T・31T(C-22区)、32T(C-23区)、33T(C-24区)設定、掘下げ。

6月1日(月)～6月6日(土)

2T(B-3区)、5T(C-5区)、11T(C-12区)設定、掘下げ。13T・14T・21T・22T・26T・28T層位断面図作成。6月3日(水)入佐教育次長、山鹿調整官他3名来跡。

6月8日(月)～6月12日(金)

12T・15T・27T・30T掘下げ。完掘状況写真撮影。3T出土の頁岩製剥片平板実測。B-12・13区(B地点)拡張、表土剥ぎ。

6月15日(月)～6月20日(土)

確認トレンチで遺物包含層が確認されたB・C-3・4区(A地点)、B-11～13区(B地)、B・C-16～18区(C地点)の拡張、表土剥ぎを行う。C地点表土より土器小片出土。B地点表土よりチャート片出土。15T・30T層位断面図作成。

6月22日(月)～6月27日(土)

B地点・C地点掘下げ。C-17区Ⅱ層より磨製石斧出土。写真撮影。平板実測。

6月29日(月)～7月4日(土)

C地点掘下げ。C-17区Ⅲb層より炭化物多量に出土。B地点掘下げ。B-13区Ⅱ層茶褐色粘質土層よりチャート製打製石鏃出土。写真撮影。平板実測。

7月6日(月)～7月11日(土)

B地点Ⅱ層掘下げ。B-13区Ⅱ層茶褐色粘質土層より土器片出土。写真撮影，平板実測。C地点Ⅲ層掘下げ，出土遺物平板実測。

7月13日(月)～7月18日(土)

A地点(B・C-3・4区)表土剥ぎ，Ⅱ層掘下げ。表土中より土器片・陶器片出土。B地点Ⅱ層出土遺物平板実測。

7月20日(月)～7月25日(土)

A地点Ⅲa層掘下げ。炭化物出土。C地点B-16区Ⅲb層より頁岩製剥片出土。遺物出土状況写真撮影，平板実測。節田小学校5・6年生体験学習。

7月27日(月)～8月1日(土)

A地点Ⅲb層掘下げ。B地点Ⅲa～Ⅲb層掘下げ。C地点Ⅲb～Ⅲc層掘下げ。玉龍高校教諭成尾英仁先生地質・地層について現地指導(7月29日～31日)。県文化財保護審議会委員河口貞徳先生発掘調査指導(7月30・31日)。大島教育事務局日高管理課長他3名来跡。

8月3日(月)～8月8日(土)

A地点Ⅲb～Ⅲc層掘下げ，C-3区北側断面図作成。B地点Ⅲb層掘下げ，C地点C-13区東側断面図作成。B・C-16・17区ベルトはずし。鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏・沖縄国際大学学長高宮廣衛氏・熊本大学教授白木原和美氏来跡，助言。立園埋蔵文化財係長・京田文化課主査発掘調査指導のため来跡。

8月10日(月)～8月15日(土)

A地点B・C-3・4区Ⅲc層より頁岩製剥片34点出土。出土状況写真撮影。実測取り上げA地点・B地点・C地点Ⅳ層上面コンタ図(20cm)作成。出土遺物整理作業，発掘器材運搬。関係機関への事務連絡。発掘調査終了。

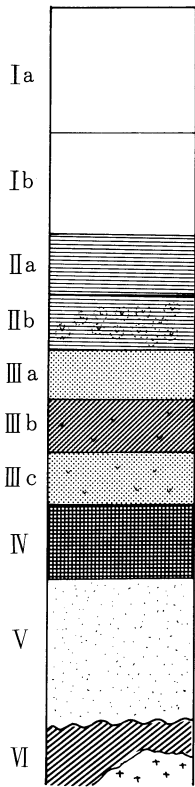
## 第 4 章 層 序

遺跡内の地層は場所によって層厚に若干の相違はあるが、基本的にはⅠ層耕作土からⅥ層基盤岩まで第3図のように6層に区分できる。

**Ⅰ層** やや灰色を帯びた褐色～茶褐色の未固結砂層で、海棲貝の小片を多く含んでいる。砂粒は細～中粒の有孔虫の殻が主体をなす。色調・粒子の違いによって上下2層（Ⅰa・Ⅰb）に区分できる。Ⅰa層は現在の耕作土で約25cmの厚さで堆積している。Ⅰb層は有機質の茶褐色層であるがⅠa層より粒子が細かい。

**Ⅱ層** 茶褐色粘質土層。乾燥すると縦に強いクラックがはいる極めて粘質の強い層である。色調の違いによって上下2層（Ⅱa・Ⅱb）に区分できる。Ⅱa層は縄文時代の土器片・磨製石斧・打製石鏃などが出土する遺物包含層である。Ⅱb層はⅡa層よりも色調がやや明るく、黄橙色の親指大の円形の土粒がブロック状に含まれている。Ⅱa層とⅡb層との境界はB地点においては割合に明瞭であるが、他の地点においては不鮮明である。上位のⅠ層との境界はシャープであるがⅢ層とは漸移している。Ⅱ層からアカホヤ火山灰に対比できる火山ガラスが検出された。（詳細は第7章）

**Ⅲ層** 色調の違いによって3層（Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc）に区分できる。Ⅱ層に比べて粘質が弱く、クラックがはいらない。Ⅲa層は褐色粘質土で粘質は比較的弱い。下位のⅢb層との境は不鮮明で漸移している。Ⅲb層は炭化木片などの炭化物を多く含む暗褐色の粘質土で弱いクラックがはいる。本層下部には拳大のカコウ岩礫が散在している。Ⅲc層はⅢa層類似の褐色を呈している。Ⅲb層とは漸移しているがC地点では不鮮明である。Ⅲa層は無遺物層であるが、Ⅲb・Ⅲc層から頁岩製の磨製石器、剥片等が出土した。Ⅲb・Ⅲc層から出土した炭化木片の絶対年代測定ではⅢb層 $18,600 \pm 230$ 、Ⅲc層 $21,400 \sim \infty$ の値が出た。また、Ⅲb・Ⅲc層からAT火山灰に対比できる火山ガラスが検出された。（詳細は第7章）

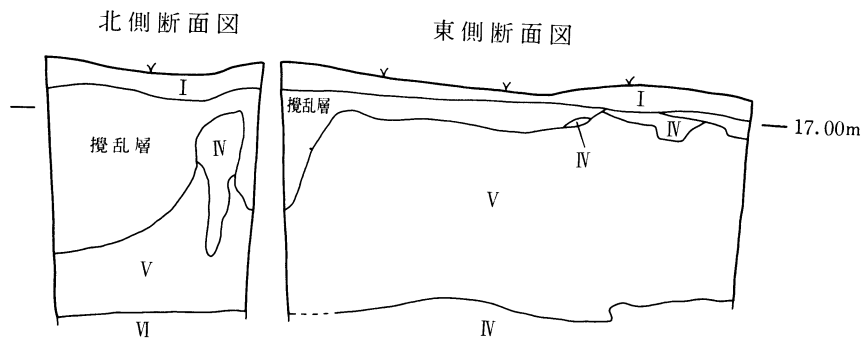


第3図 土層模式柱状図

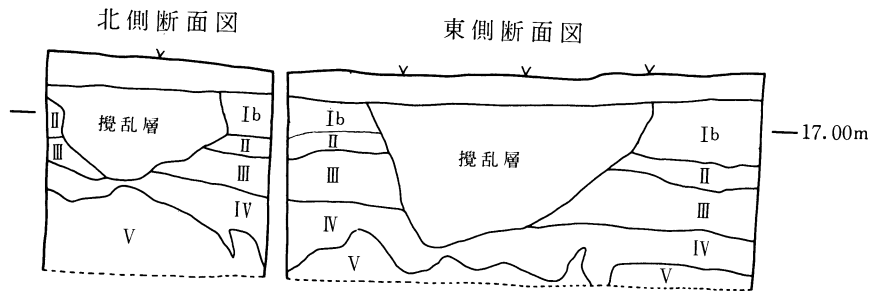
**Ⅳ層** 赤褐色粘質土。濃い赤褐色を呈し風化が著しく粘質が強い。透水性が極めて低い。本層は奄美地方で「マージ」と称されている粘質土に相当する。

**Ⅴ層** 淡褐色砂混土。カコウ岩が風化したマサ土であるが、場所によって砂粒の大きさ、風化度、色調などが変化する。砂粒の粗いところでは砂岩、頁岩などの小岩片が混入している。

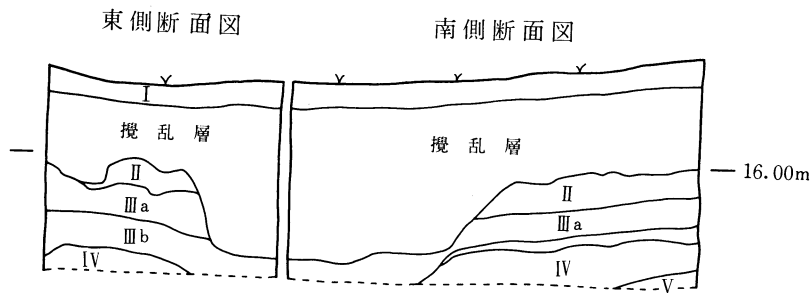
**Ⅵ層** 基盤岩。風化した頁岩、千枚岩、カコウ岩などからなるが、カコウ岩の貫入による攪乱をうけ全体的にもろく崩れやすくなっている。



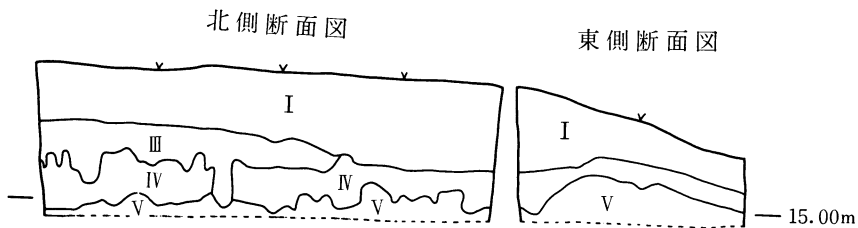
C-14区 (13トレンチ)



B-15区 (14トレンチ)

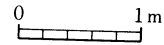


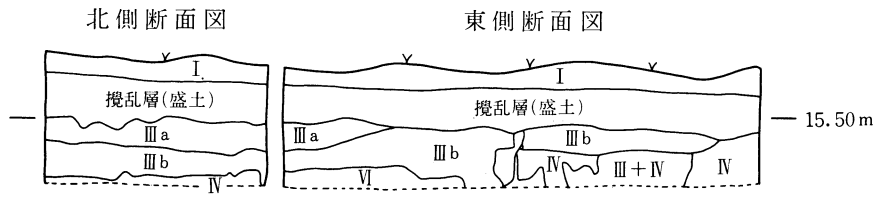
C-16区 (15トレンチ)



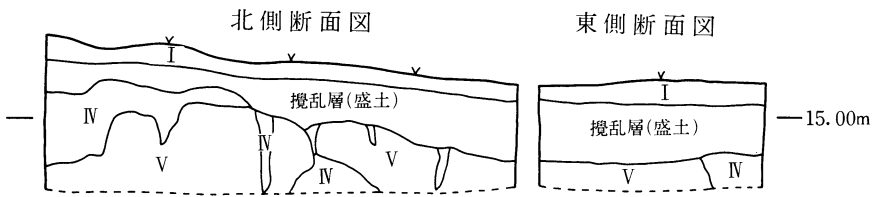
C-18区 (21トレンチ)

第4図 土層断面図 (13, 14, 15, 21トレンチ)

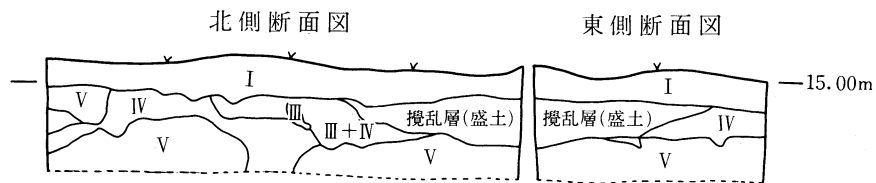




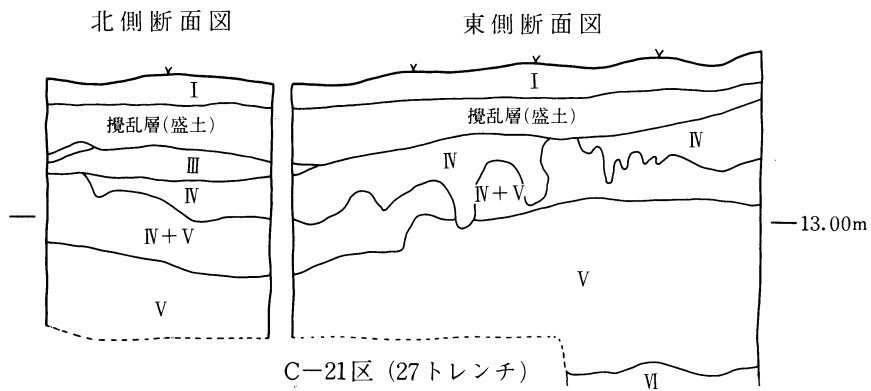
B-19区 (22トレンチ)



C-20区 (24トレンチ)



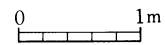
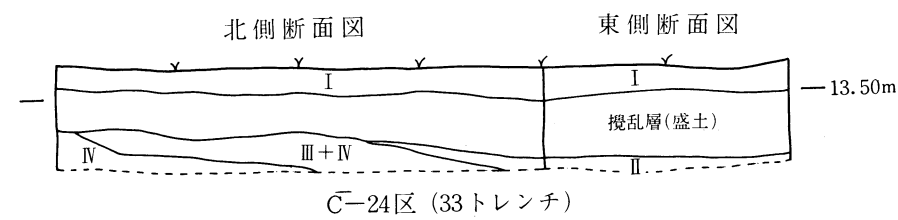
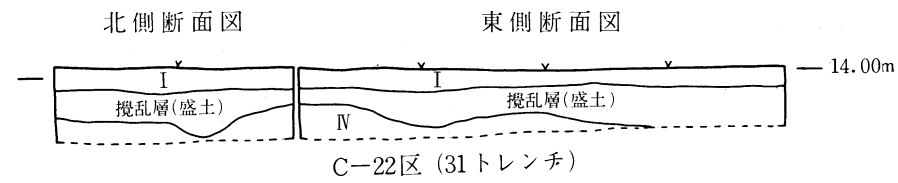
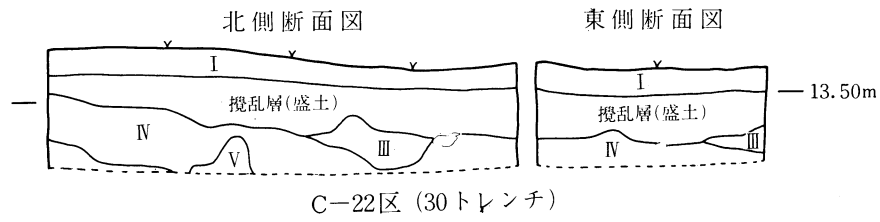
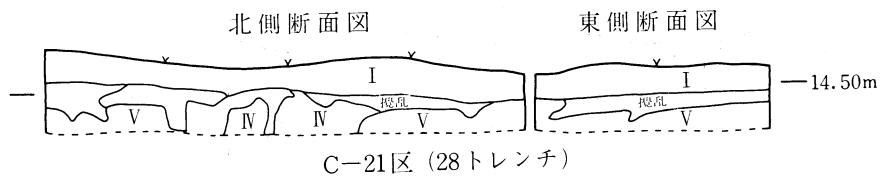
C-20区 (26トレンチ)



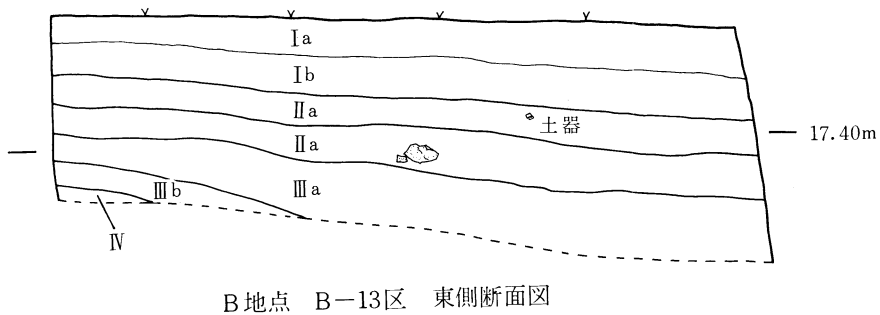
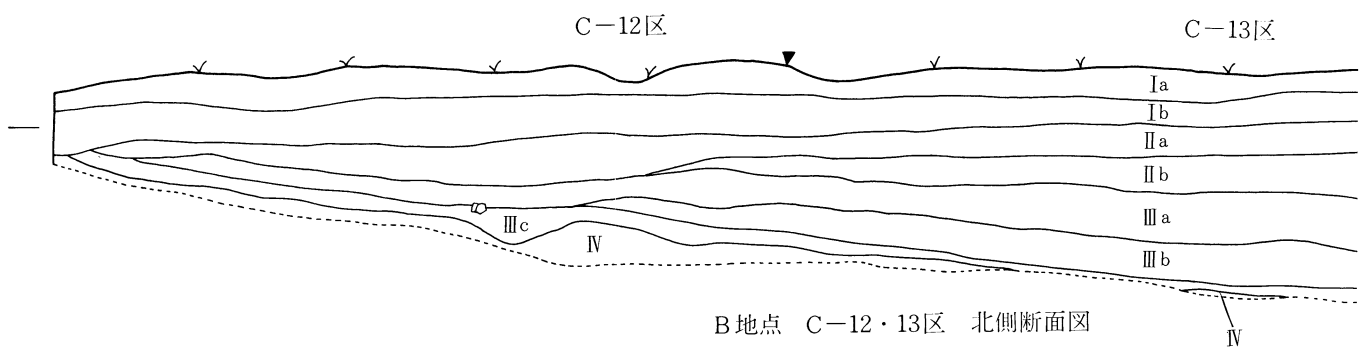
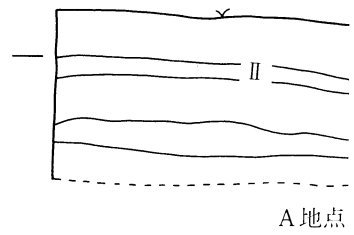
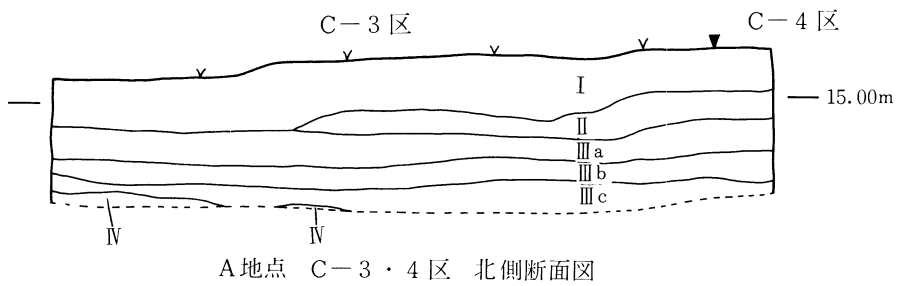
C-21区 (27トレンチ)

第5図 土層断面図 (22, 24, 26, 27トレンチ)

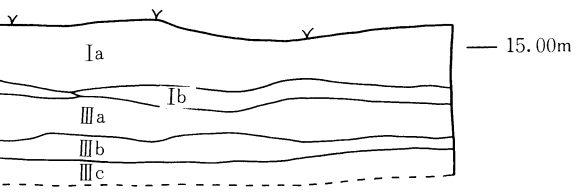




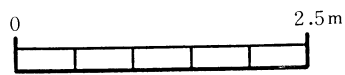
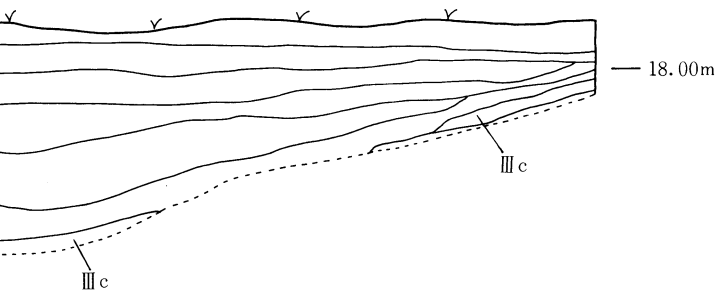
第6図 土層断面図 (28, 30, 31, 33トレンチ)

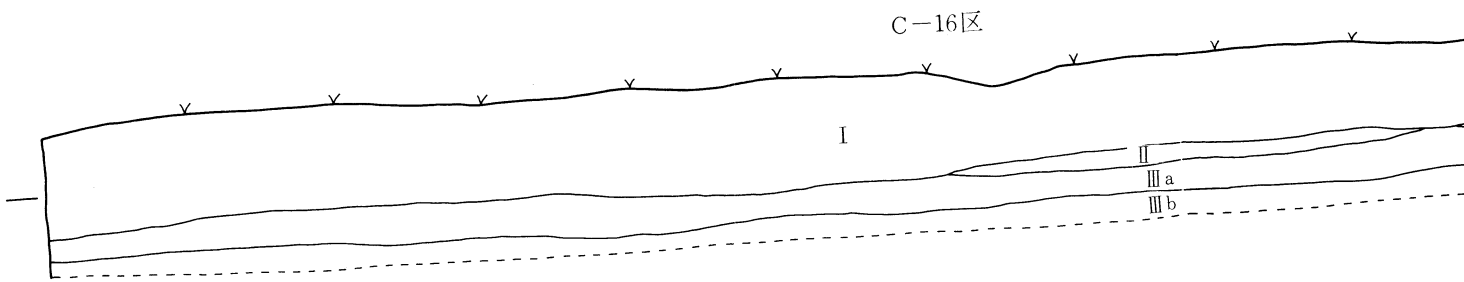


第7图 土层断面图 (A地点·B地点)

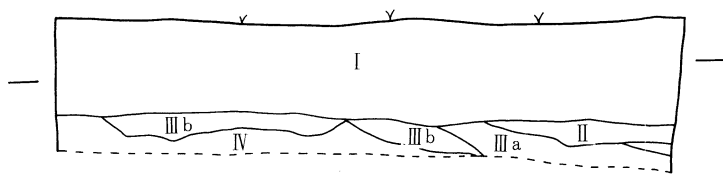


C-3区 东侧断面图

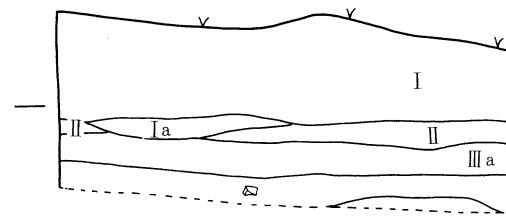




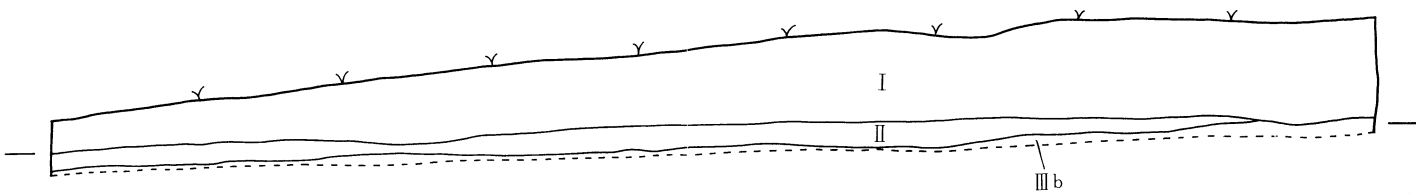
C地点 C-15·16区 南侧断面图



C地点 B-17区 东侧断面图

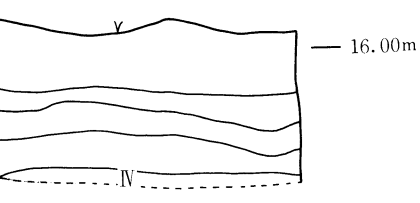
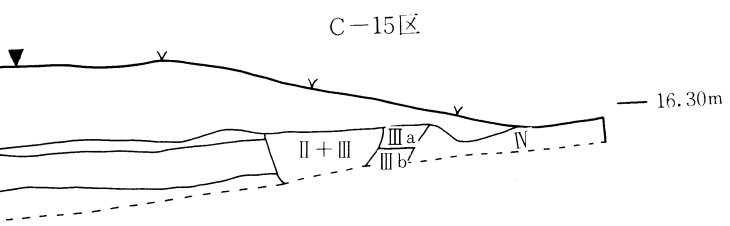


C地点 C-17区 东侧断面图



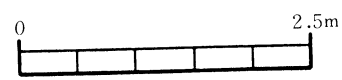
C地点 B-18区 南侧断面图

第8图 土层断面图 (C地点)



断面图

16.00m





第9図 トレンチ配置図



## 第 5 章 調査の概要

### 第 1 節 調査の概要

土浜ヤーヤ遺跡は背後に急傾斜で迫る小起伏の山地をひかえ、南方に海を望む標高16~18mの比較的なだらかな海岸段丘上に立地している。調査対象区域は蔬菜類の畑地として利用されており、畑と畑の境界にはソテツが植えられている。

調査実施にあたって10m四方を単位としてグリッドを設定することとし、道路のセンターラインNo.316とNo.317のSTA 杭を結び基準とした。この線を基準として東西、南北方向に10m方眼を組み、A-1, A-2……C-23と区を設定して区域名を表すことにした。(第9図) まず、各グリッドごとに2m×4mのトレンチによる確認調査を実施し、遺跡の範囲や遺物包含層の把握に努めた。その結果は下記ようになる。

- 1 トレンチ…Ⅳ層上部まで削平され遺物包含層は確認されなかった。
- 2 トレンチ…北側半分はⅣ層上部まで削平されていたが、南側半分は残存していた。
- 3 トレンチ…Ⅲ層から石器(削器・剥片)4点が出土した。
- 4 トレンチ…Ⅳ層上部まで削平され遺物包含層は確認されなかった。
- 5 トレンチ…Ⅲ層下部が残存していたが、上部はソテツ抜根のため攪乱されていた。
- 6~9 トレンチ…Ⅳ層上部まで削平され遺物包含層は確認されなかった。
- 10~12 トレンチ…Ⅱ層から下部が残存し、11 トレンチⅡ a 層より土器片出土。
- 13・14 トレンチ…Ⅳ層下部まで削平され遺物包含層は確認されなかった。Ⅵ層岩盤まで確認する。最下部はカコウ岩の岩盤となる。
- 15~21 トレンチ…Ⅱ層から下部が残存し、Ⅲ b 層下部においてカコウ岩の礫が出土する。20 トレンチにおいては集石の可能性あり。
- 22~33 トレンチ…Ⅳ層上部まで削平され、Ⅴ層の砂層まで掘下げるが包含層は確認できず。

以上のようなトレンチ調査の結果に基づいて、B・C-3・4区、B-12・13区、B・C-16~18区を全面発掘調査することとし、それぞれA・B・C地点と呼称した。

調査の結果、A地点からは旧石器時代の石器が出土した。トレンチ調査で確認したⅢ b 層からの遺物の出土はなかったが、下位のⅢ c 層において石器が38点出土した。そのうち3点は磨痕がみられるものである。放射性炭素による年代測定の結果、Ⅲ b 層が $18,600 \pm 230$ 、Ⅲ c 層が $21,400 \sim \infty$ の数値が測定された。また、Ⅲ b・Ⅲ c 層からAT火山灰に対比できる火山ガラスが検出された。これらの結果によって土浜ヤーヤ遺跡は奄美諸島ではじめての旧石器時代の遺跡として注目をあびることとなった。

B地点からはⅡ a 層から土器片、磨製石斧・打製石鏃が出土した。また、Ⅱ層からアカホヤ火山灰に対比できる火山ガラスが検出された。

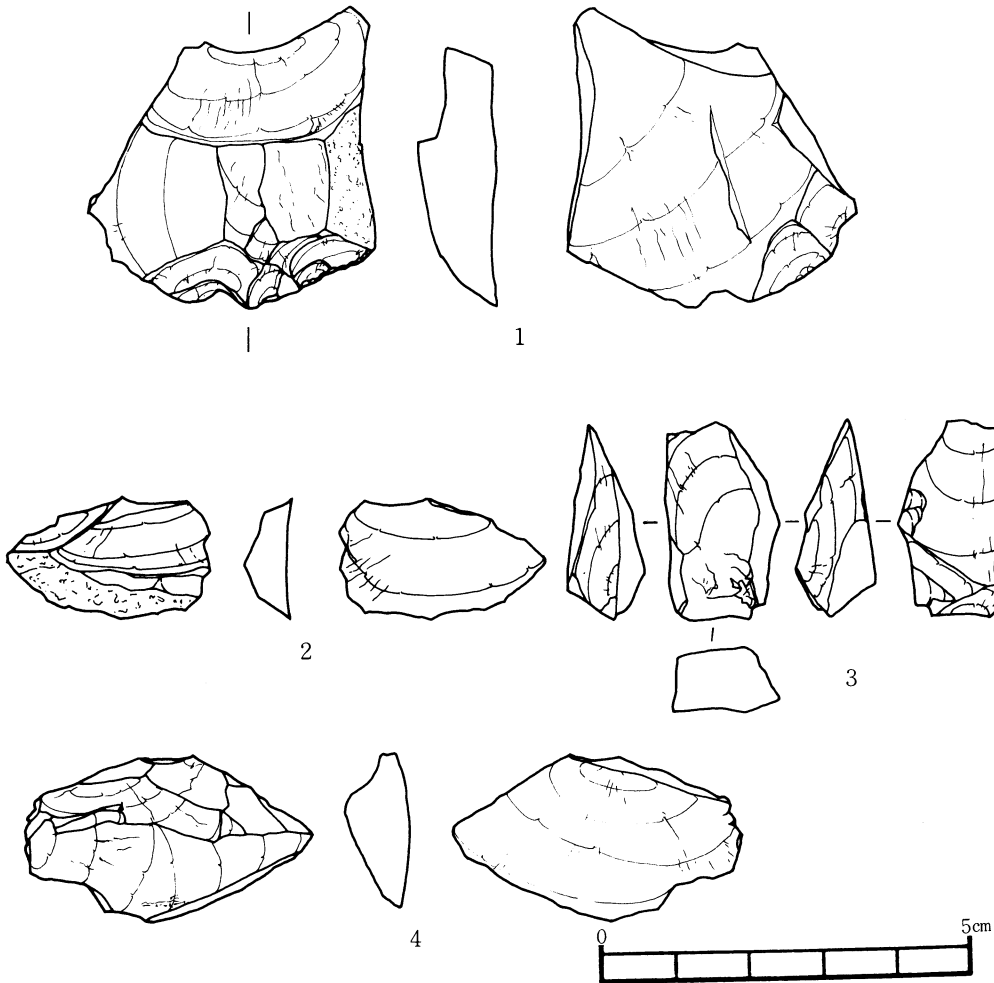
C地点からはⅢ b 層から剥片とⅡ層下部から土器片・磨製石斧が出土した。20 トレンチの集石は自然礫の散乱と確認された。



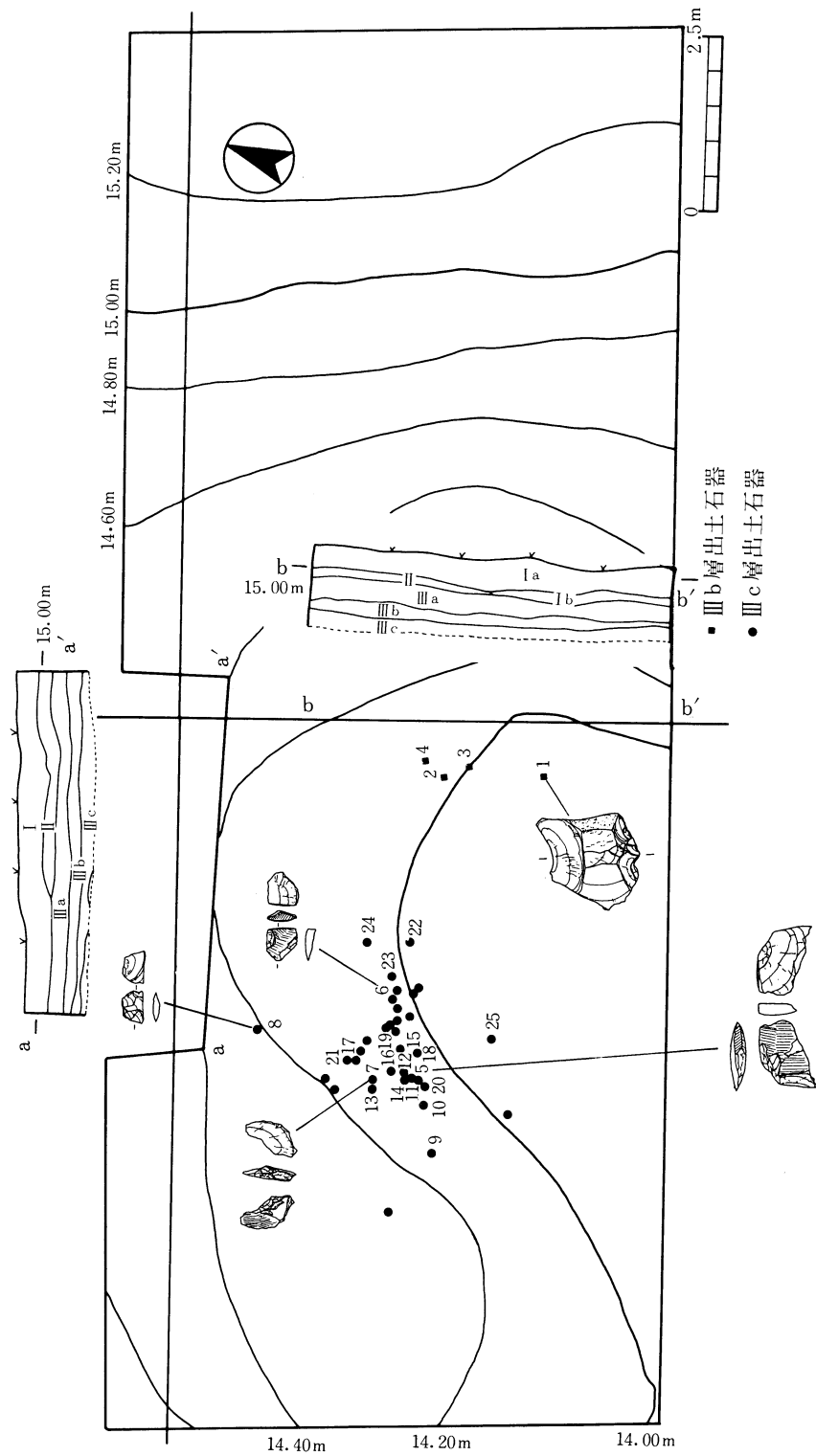
## 第2節 A地点の調査

確認調査においてC-3区第3トレンチⅢb層より頁岩製削器・剥片が出土したため遺物包含層がよく残っている部分を拡張し、B・C-3・4区の約150㎡を調査した。その結果、C-3区においてⅢc層から石器34点が出土した。そのうち3点は磨痕のみられるものである。A地点においては縄文時代の遺物包含層(Ⅱ層)は耕作等のためにほとんど削平されていた。Ⅲ層は割合に整然と堆積しているが、C-3区からC-4区にかけて北から南へ走る浅い谷地形をなし、遺物もこの谷地形に集中して分布している。

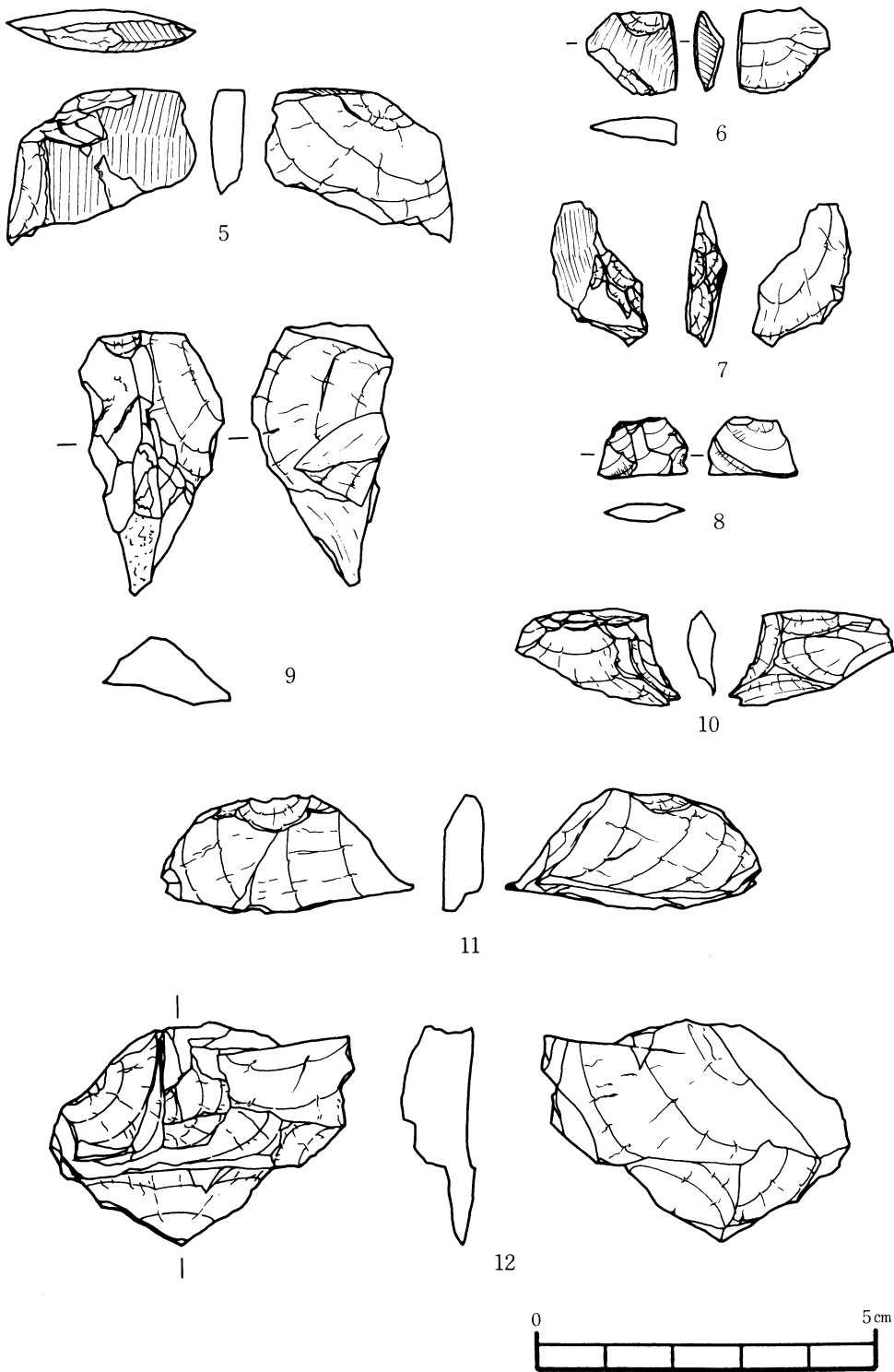
### 1. 旧石器時代



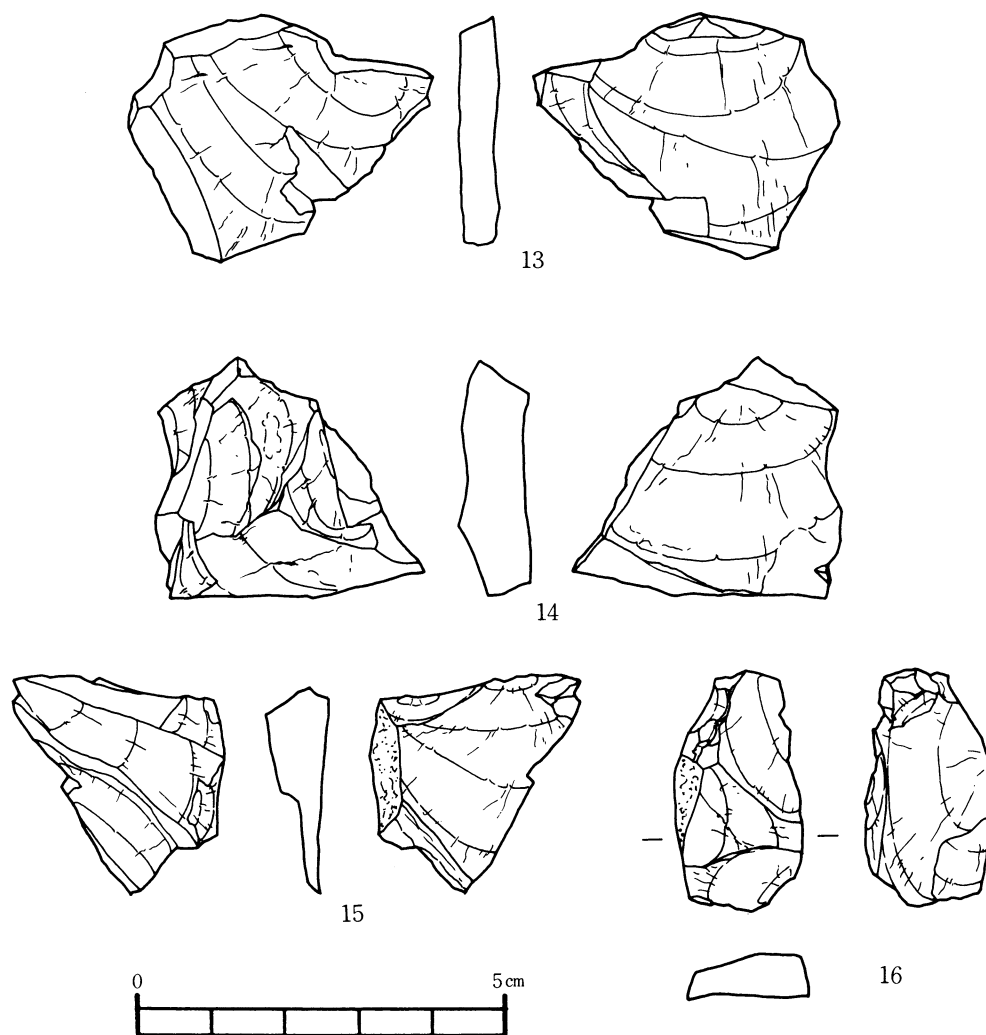
第10図 Ⅲb層出土の石器



第11圖 A地点遺物出土狀況



第12図 III c層出土の石器 (1)



第13図 Ⅲ c層出土の石器 (2)

#### Ⅲ b層出土の石器

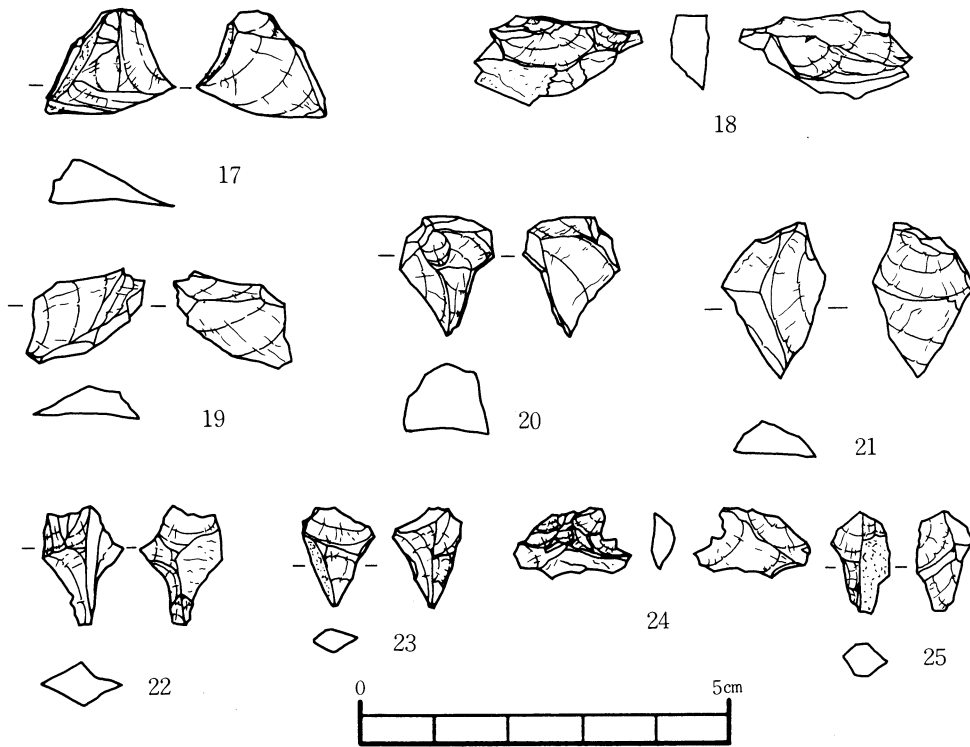
Ⅲ b層の最下部から4点の石器が出土した。

1は、頁岩製の削器である。横長の剥片を素材にして、その下位右部に刃部を施している。2～4は頁岩製の剥片である。3点とも同質の石材であり同母岩と思われる。2は一部自然面を残している。3・4の剥片の打面は全て剥離面である。4は横長の剥片である。

#### Ⅲ c層出土の石器

Ⅲ c層の最下部から34点の石器が約4 mの範囲で散在して出土した。石材は全て頁岩であり、8を除いて同質のものである。

5～7は研磨痕のある石器である。研磨痕や形状より磨製石斧が推定されるものである。5は基部付近と思われるもので、基部付近は横方向に、片面は剥離して不明であるが、他面は縦



第14図 III c層出土の石器 (3)

方向に研磨がみられるものである。6は側縁部付近と思われ、面に対して直角に形成されている。やはり側辺部は横方向に、面に対しては縦方向に研磨がみられる。7は研磨のみられる剥片である。これらは形態的にも、石材としても類似するところが多く、同一物体である可能性が高い。

8～18は剥片である。8を除いて剥離方向に一定性がなく、多方向からの剥離痕がみられるものが多い。8はやや硬質の頁岩製で、よく整形された縦長剥片の頭部付近である。打面調整痕が残存し、定形の石核から剥離されたものである。9は自然面の残った厚手の剥片であり、打撃痕がみられる。10はやや薄手の剥片で剥離痕がよくみられる。11は自然面を残した横長の剥片であるが加工・使用痕等は認められない。12は厚手の剥片であり、一部加撃による調整痕がみられる。剥離方向に一定性がなく、多方向からの剥離痕がみられる。13～15は横長の剥片を素材としたやや大きい剥片である。16は自然面を残したやや厚みのある縦長剥片であり、17は節理のみられる剥片である。18も頁岩製の剥片であり、上縁辺部に加工がみられる。石材がもろく、全体的に欠損部が多く断定できないが、これはナイフ形石器の刃潰し加工に類似している。

19～25は碎片である。碎片は全部で20点出土した。全て同タイプの頁岩を石材としている。

第2表 石器計測表

番号	器種	石材	区	層	最大長	最大幅	厚さ	重量	備考
1	削器	頁岩	C-3	Ⅲb	3.5cm	3.8cm	1.0cm	16.55 <sup>g</sup>	
2	剥片	頁岩	C-3	Ⅲb	1.6	2.2	0.6	2.5	
3	剥片	頁岩	C-3	Ⅲb	2.7	1.5	0.9	3.5	
4	剥片	頁岩	C-3	Ⅲb	2.2	3.9	0.9	4.95	
5	磨製石器	頁岩	C-3	Ⅲc	1.9	2.6	0.5	3.45	
	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.8 0.5	1.1 1.0	0.1 0.2	0.2 0.1	
6	磨製石器	頁岩	C-3	Ⅲc	1.8	1.2	0.5	1.0	
7	磨製石器	頁岩	C-3	Ⅲc	1.2	1.3	0.4	0.55	
8	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.8	1.2	0.3	0.3	
9	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	3.8	1.9	0.7	6.25	
10	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.3	2.0	0.4	1.3	
11	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.7	3.7	0.6	3.25	
12	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	3.2	4.3	1.0	16.2	
13	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	3.1	4.0	0.5	7.25	
14	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	3.3	3.5	0.9	12.0	
15	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	2.3	2.7	0.9	6.0	
16	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	3.2	1.7	0.6	4.4	
17	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.4	1.6	0.6	1.05	
18	剥片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.2	2.0	0.5	1.3	
19	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.0	1.5	0.4	0.7	
20	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.7	1.2	0.9	1.6	
21	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	2.0	1.4	0.4	1.1	
22	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.6	1.1	0.6	0.5	
23	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.3	1.0	0.3	0.25	
24	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.9	1.6	0.3	0.3	
25	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.4	0.7	0.4	0.3	
27	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.7 0.7	0.3 0.4	0.1 0.2	0.05未満 0.05未満	
28	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.6	0.5	0.1	0.1	
29	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.6	0.6	0.1	0.05	
30	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.6	0.4	0.1	0.05未満	
31	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.7	0.3	0.4	0.05未満	
32	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.6	0.7	0.1	0.05	
33	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.9	0.5	0.2	0.1	
34	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.8	0.3	0.2	0.05	
35	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	0.6	0.3	0.2	0.05未満	
36	碎片	頁岩	C-3	Ⅲc	1.2	0.5	0.1	0.05	

## 2. 表層の遺物

I層耕作土及びC-2区のカコウ岩風化露頭（径約4m、高さ約2m）中から土器片・陶磁器片が出土した。

### 土器（第15図27～32）

27～30は兼久式土器、31・32は土師器である。

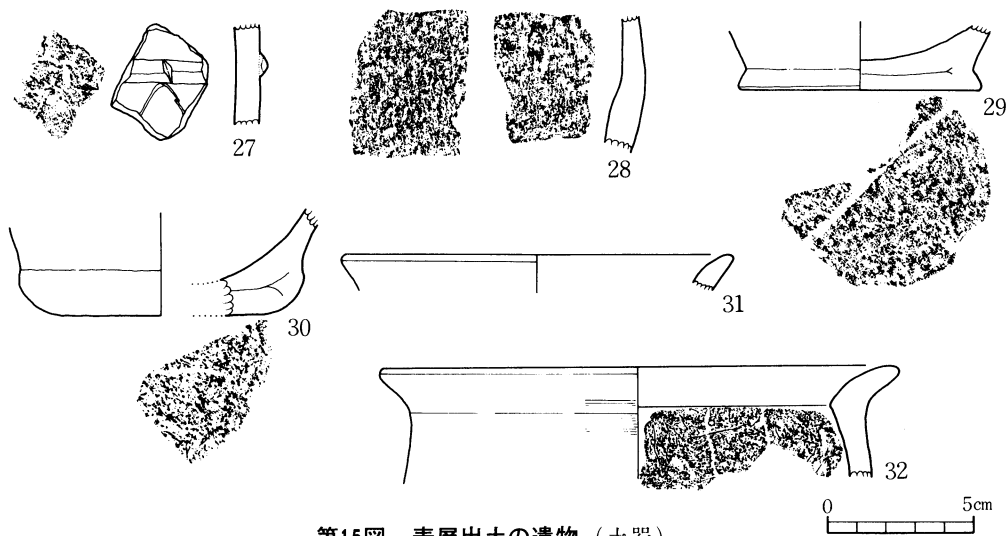
27は小破片であるが刻目突帯を有するもので、突帯下にも浅い沈線による曲線が施されている。胎土に微細な石英粒を多く含み、内外面ともに褐色を呈し焼成は良好である。

28は胴部の破片であるが淡褐色を呈し、内面には指頭圧痕がわずかに残る。胎土の粒子は細かく焼成も良好である。

29は薄手の底部で外面にわずかに張り出すものである。底部径8cmを測る。底面中央部には幅約2mmの直線的な沈線がみられる。淡褐色を呈し内面には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土の粒子は細かく焼成も良好である。

30は底部が丸くおさまるもので、底面に浅い沈線がみられる。赤褐色を呈し胎土に粗い石英粒を多く含んでいる。

31・32は厚手の土師器口縁部である。32は復元口径17.5cmを測り口縁が「く」の字状に折れ内面にわずかにヘラケズリ調整がみられる。31・32ともに外面赤褐色、内面茶褐色を呈し、胎土に粗い石英粒を多く含んでいる。



第15図 表層出土の遺物（土器）

### 陶磁器（第16図33～41）

33は磁器染付碗の口縁部で外内面に呉須による圈線を巡らす。

34は磁器染付碗の体部破片であるが外面に呉須による渦巻き文が描かれている。

35は陶器染付碗の底部で外面高台に呉須による圈線、内面見込みに花文(?)が描かれている。また、高台内面まで施釉されている。

36は磁器染付碗の底部で体部下部と高台に1本ずつの圈線を巡らす。内面見込みに重ね焼きのための目砂が付着している。

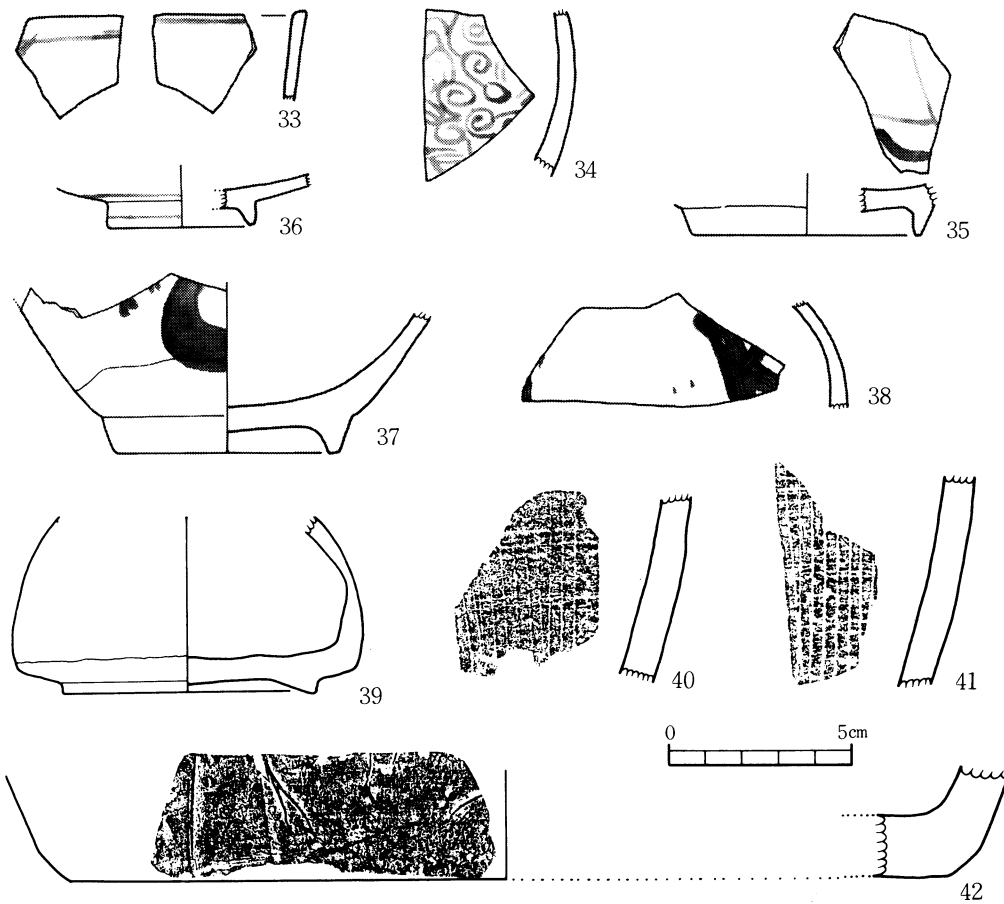
37は磁器染付碗の底部で底径6cm測る。外面に鉄釉による文様が描かれ透明釉が施されているが、高台および高台内部は無釉である。重ね焼きのため見込み下部は施釉されておらず、目砂が付着している。

38は陶器茶家の肩部と思われるが、外面に沈線による幾何文様を描き、その上に濃いるり色の彩色を施している。

39は陶器瓶類の底部と思われるが、底径6.8cmを測る。外面に褐釉が施釉され、高台付近及び高台内部は無釉である。高台内面にケズリ出しがみられる。

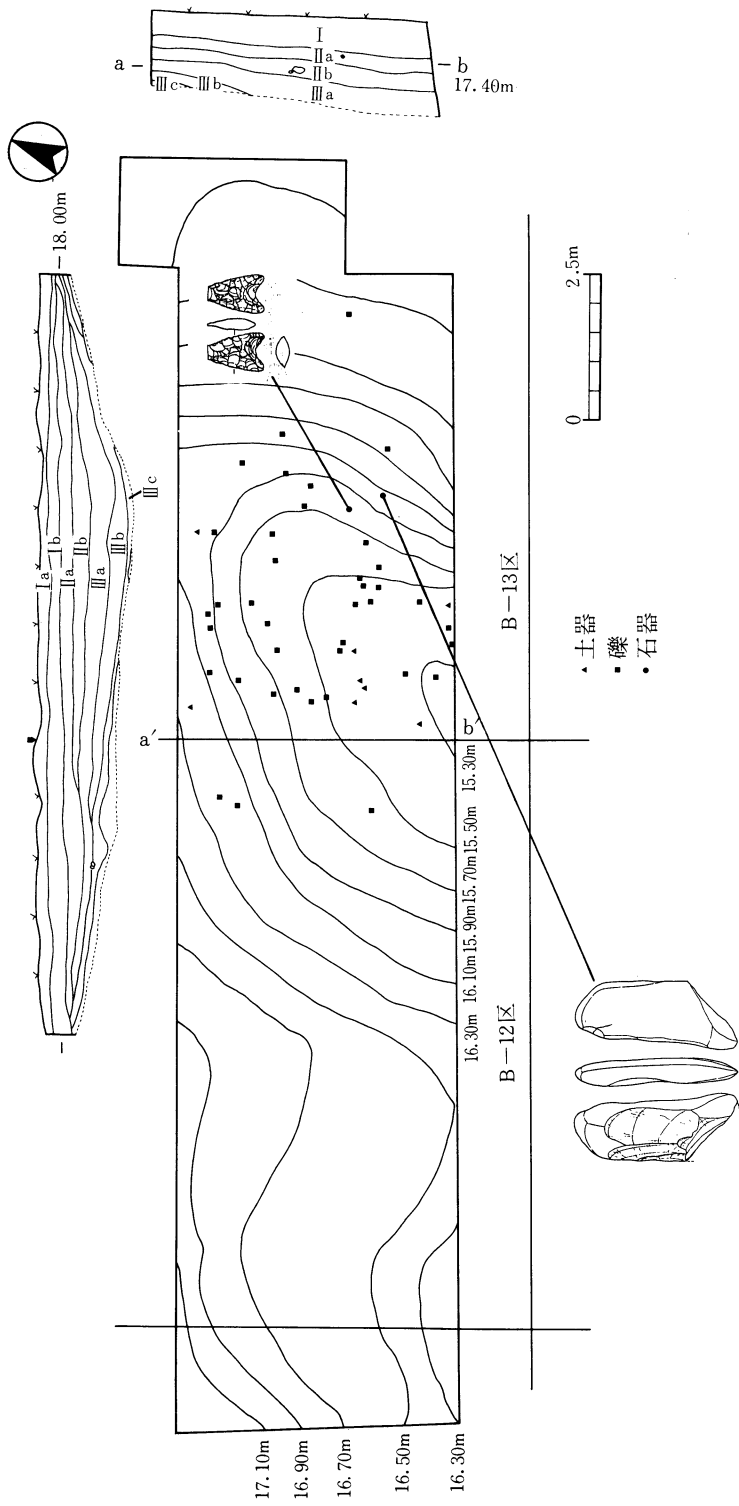
40・41は摺鉢の破片で内面見込みのかき目は縦位である。素地は赤褐色を呈し、外面にのみ緑褐色の釉を施し焼成は良好である。

42は陶器甕類の底部と思われるが、素地は暗茶褐色を呈し焼成堅致である。外面にヘラケズリ・ハケ目痕、内面にハケ目痕が明瞭に残っている。



第16図 表層出土の遺物（陶磁器）





第17图 B地点遺物出土状況

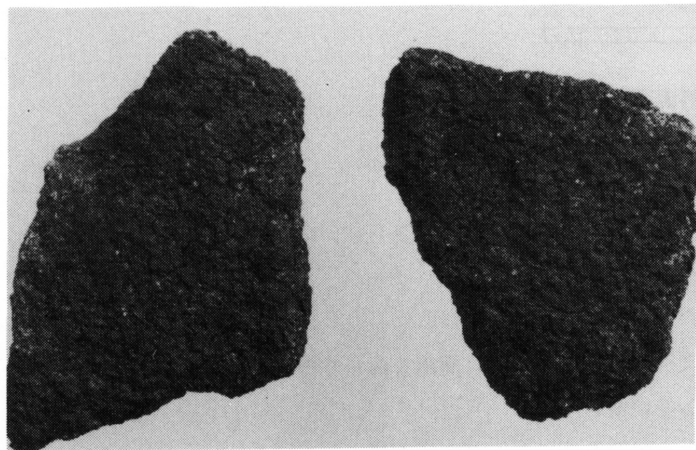
### 第3節 B地点の調査

確認調査においてB-12区第11トレンチⅡ層より縄文時代のもと思われる土器片が出土したため、遺物包含層がよく残存している部分を拡張しB-12・13区の約110㎡を調査した。拡張区の東南C-12・13区は、畑地造成のため遺物包含層はすでに削平されていた。調査の結果、Ⅱ層茶褐色粘質土層より土器片、磨製石斧1点、打製石鏃1点が出土した。Ⅲ層からの遺物の出土はなかったが、B-13区から12区にかけて北から南に走る浅い谷地形が検出された。

#### 1. 縄文時代

Ⅱ層茶褐色粘質土から土器片10数点・磨製石斧1点・打製石鏃1点が出土した。

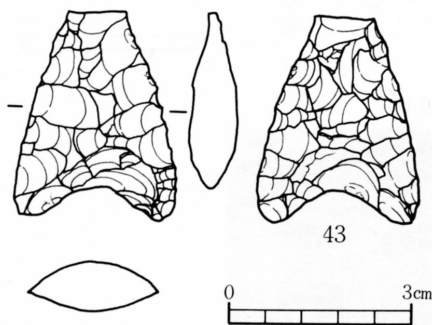
##### 土器



10数点出土したがいずれも小片である。器壁の厚さ8mm~12mmのわりあい厚手の土器で、外内面ともに赤褐色を呈し、胎土に石英粒を多く含んでいる。いずれも小破片で、しかも土器表面の剥落が著しく、文様等の判別は困難である。

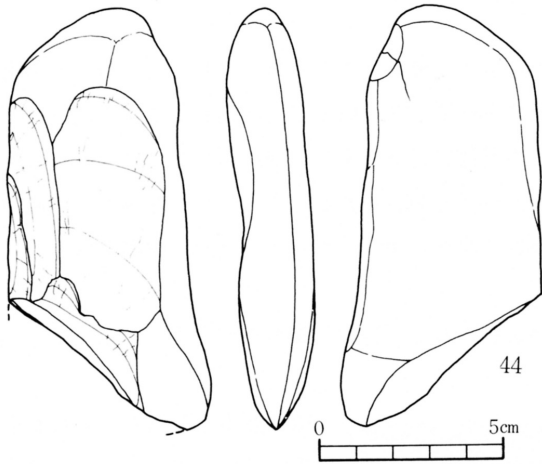
##### Ⅱ層出土の土器

##### 石器 (第18図・19図)



43はB-13区Ⅱ層から出土した赤褐色を呈するチャート製の打製石鏃である。丁寧な剥離調整が施されているが、先端部は欠損している。側面は外湾し最大幅が下方にある。基部は逆刺が円く抉りが浅い。残存最大長2.9cm，最大幅2cm，最大厚0.65cm，重量3.6gを測る。

第18図 Ⅱ層出土の打製石鏃



44はB-13区Ⅱ層から出土した頁岩製の磨製石斧である。刃部の5分の4ほど欠損している。自然の河原石を利用し、粗い剥離によって全体を整形し、刃部のみ両側からの研磨によって鋭く仕上げられている。現存最大長11.4cm、最大幅5.5cm、最大厚2.0cm、重量161gを測る。

第19図 Ⅱ層出土の磨製石斧

2. 表層の遺物 (第20図45~48)

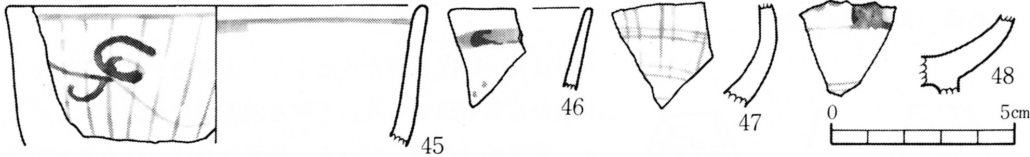
I層耕作土から磁器染付碗の破片が数点出土した。

45は復元口径11.5cmを測る。外面に呉須による縦位の線、さらに口縁近くに1状の太い圈線と花文を描いている。内面口縁にも圈線を巡らしている。

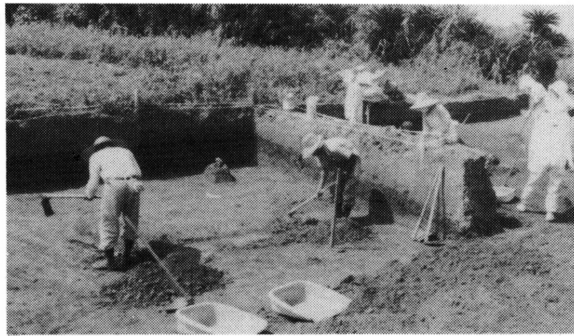
46は外面に花文(?)を描いたものである。

47は外面に呉須による格子状の文様、見込み底近くに圈線を巡らすものである。また、見込み底部は重ね焼きのため釉が剥落している。

48は体部下部及び高台に呉須による圈線を巡らし、ダミ絵が描かれている。



第20図 表層出土の遺物

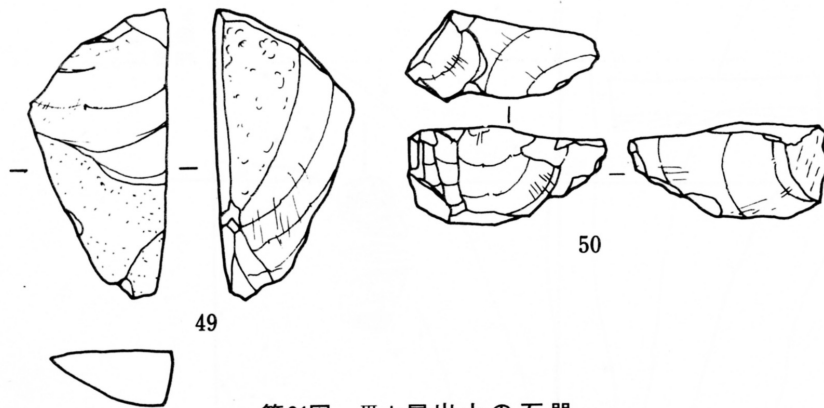


#### 第4節 C地点の調査

確認調査においてC-18区第20トレンチⅢb層よりカコウ岩の礫群が検出されたため、遺物包含層が残存している部分を拡張しB・C-16・17・18区の約320㎡を調査した。調査の結果第20トレンチ出土の礫群は自然堆積であることが判明したが、C-18区においてⅡ層茶褐色粘質土層より磨製石斧、B-17区においてⅢb層から頁岩製剥片が出土した。また、Ⅲb層からは炭化物が多量に出土し、中には拳大の炭化木片も含まれていた。遺物包含層は、原地形に沿って北西方向から南東方向へと緩やかに傾斜している。

##### 1. 旧石器時代 (第21図49・50)

B-17区においてⅢb層下部から剥片が2点出土した。49は硬質の頁岩を石材とし、上端部に加撃痕がみられる。最大長3.6cm、最大幅1.7cm、重量3.75gである。50はやや軟質の頁岩

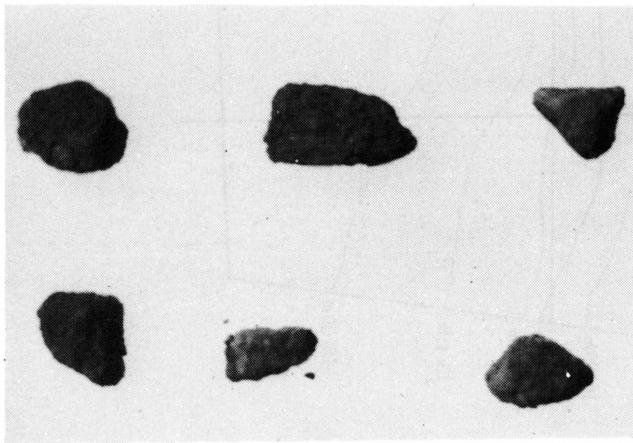


を利用した剥片であるが、打点、剥離痕に統一性がなく、石器としての使用は不明である。最大長2.6cm、最大幅1.2cm、重量2.35gを測る。

第21図 Ⅲb層出土の石器

##### 2. 縄文時代

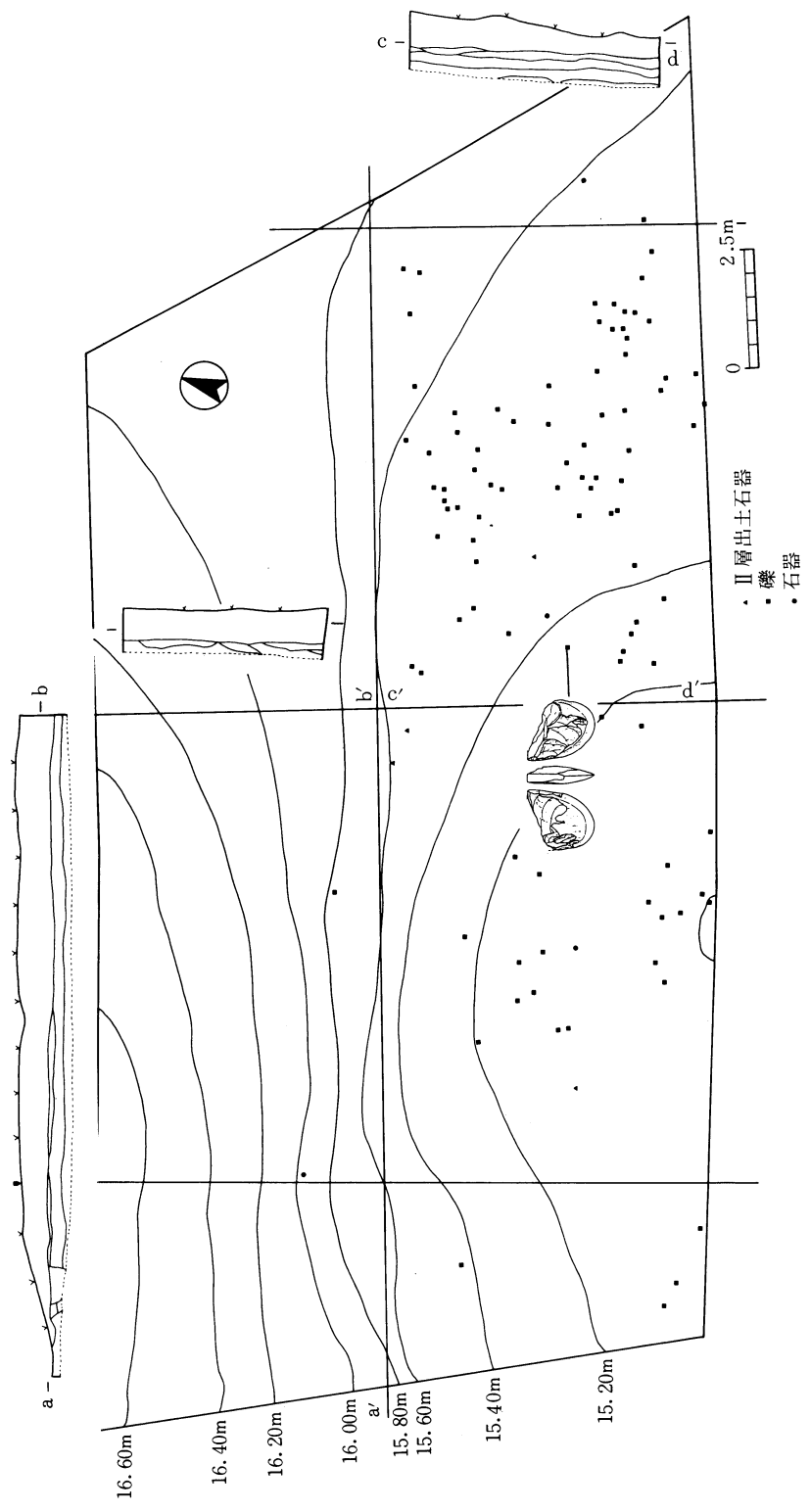
C地点の北側B-17・18区においては縄文時代の遺物包含層(Ⅱ層)はほとんど削平されていたが、南側C-16~18区においては比較的良好な状態で残存していた。C-17・18区において土器片6点、C-8区において磨製石斧1点が出土した。



Ⅱ層出土の土器

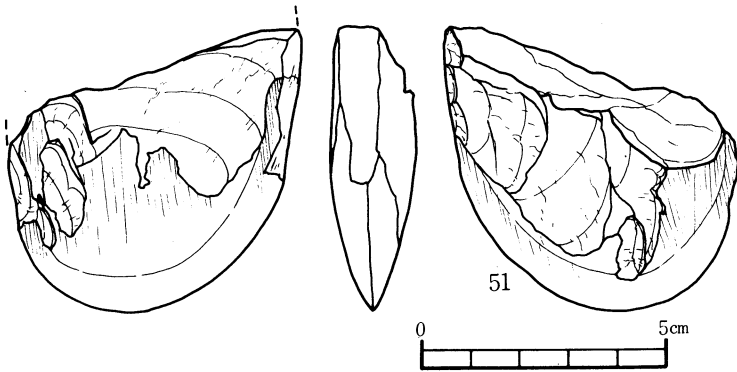
##### 土器

6点出土したが、いずれも小破片である。器壁の厚さ1cm前後のわりあいに厚手の土器で、胎土に石英粒を多く含んでいる。剥落がはげしく文様等の判別は困難である。



第22図 C地点遺物出土状況

石器（第23図）



第23図 II層出土の石器

鉤化作用をうけた硬質頁岩製の磨製石斧である。基部を破損しているが、刃部周辺のみ研磨がみられ、蛤刃の刃部は両側から鋭く仕上げられている。残存最大長5.9cm，最大幅5.7cm，最大厚1.7cm，重量107gを測る。

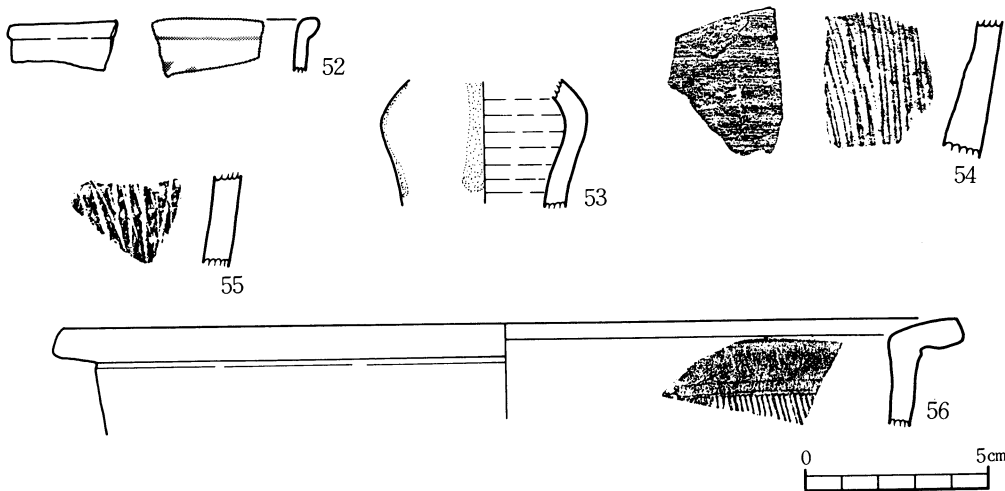
3. 表層の遺物

I層耕作土から磁器染付碗・陶器瓶・摺鉢の破片等が数点出土した。

52は端反りの口縁部をもつ磁器染付碗で見込み口縁部に呉須による圈線を巡らすものである。

53は陶器花瓶の胴部と思われるが、外面は褐釉の上に白色不透明の釉を二重掛けしている。内面には約5mm幅のロクロ目が明瞭に残っている。

54・55・56は摺鉢の破片である。56は口縁部が若干内湾気味に外へ開くもので、口縁端は「」状の張りだしをもつ。見込みのかき目はわりあい密な縦位のものである。外面のみ暗緑色釉を施す。素地は暗茶褐色を呈し焼成堅致である。54は見込みのかき目が粗いもので、外面に横位のナデ痕がみられる。54・55ともに素地は赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第24図 表層出土の遺物

## 第 6 章 ま と め

土浜ヤーヤ遺跡では奄美諸島で初めての旧石器時代の遺物が発見され、奄美諸島の歴史が旧石器時代までさか上ることが判明した。また、A T火山灰、アカホヤ火山灰を検出し、九州本土と同様の鍵層が与えられ今後の調査が進めやすくなった。また、アカホヤ火山灰と相前後する層位より石斧、石鏃、土器片が出土し、縄文時代でも古い時期の遺物が発見された。土浜ヤーヤ遺跡の周辺は、奄美では比較的早くから開墾された地域で、縄文時代の上部の層位は削平され包含層は確認出来なかった。以下、時代ごとに若干まとめたい。

### 旧石器時代

第Ⅲ c、第Ⅲ b層より石器が出土した。

第Ⅲ c、第Ⅲ b層の土壌分析をしたところ、火山ガラス屈折率測定で両層とも A T火山灰に類似するものであることが判明した。<sup>1)</sup>

第Ⅲ c層は総数34点の石器が約4 mの範囲にユニット状に散在して出土した。研磨痕のある石器3点、剥片11点、碎片20点である。遺物は第Ⅲ c層最下部で出土した。これは A T火山灰の下位よりの出土である。また、第Ⅲ c層最下部の炭化木片(0.2 gと少量であった)の放射性炭素測定の結果、21,400~∞ Y. B. P (K S U1571)<sup>2)</sup>の絶対年代が測定された。九州本土では、A T火山灰の下位より遺物が出土した遺跡として鹿児島県上場遺跡、熊本県下城遺跡、同狸谷遺跡等<sup>3)</sup>が知られている。<sup>4)</sup>

研磨痕のある石器は、研磨痕、形態より磨製石斧が推定される。現在、A T火山灰の下部から出土した磨製石斧は、東京都鈴木遺跡<sup>6)</sup>、同高井戸東遺跡<sup>7)</sup>、千葉県三里塚No.55遺跡<sup>8)</sup>、埼玉県風早遺跡<sup>9)</sup>、群馬県岩宿遺跡<sup>10)</sup>等、関東地方を中心に出土している。小田静夫氏は、A T火山灰下部の局部磨製石斧を3タイプに分け、分類を行っている<sup>11)</sup>。しかし、これらは全て刃部を研磨し、全体の調整は打撃で行う刃部磨製石斧であり、本遺跡出土の磨製石斧は、側刃部及び基部も研磨し、全体も研磨調整するなどの違いがみられる。これ等の違いについて今後の検討を要するものであろう。

剥片・碎片については、8の剥片を除き全てが遺跡周辺で採集される頁岩を使用している。また、同母岩を利用したと思われるものも多く、石核・ハンマーストーン等の出土はなかったが剥離痕等の観察によると周辺で石器製作が行われたものと思われる。

第Ⅲ b層最下部より削器1点、剥片3点の計4点の石器が出土した。第Ⅲ b層も A T火山灰を含んでいる層位である。この第Ⅲ b層下部では炭化木片が多く検出され、なかには拳大のものまであり、絶対年代は、18,600±230 Y. B. P (K S U1570)の結果が測定された。削器はやや硬質の頁岩を石材とし、剥片3点は同母岩と思われる石材を利用している。

このような結果から、本遺跡は奄美諸島で初めて発見された旧石器時代の遺跡となったのであるが、南西諸島では1936年、徳永重康博士によって調査された沖縄県伊江島カダ原洞穴<sup>12)</sup>から鹿化石骨の発見があった<sup>13)</sup>。その後、沖縄県では山下町第1洞穴<sup>14)</sup>、伊江島ゴヘズ洞穴、港川遺

<sup>15)</sup> 跡、<sup>16)</sup> 普天満宮洞穴遺跡等から鹿化石骨の叉状骨器が出土している。山下町第1 洞穴においては、叉状骨器の他、鹿角の先端を両面から加工して、両刃状に整形された斧状鹿角器、ストーンボールが出土している。1968年の調査によって人骨が出土し、また炭化木片の放射性炭素測定で、 $32,100 \pm 1,000$  Y. B. Pとする結果が出ている。港川遺跡でも1970年の調査によって、人骨の出土した層位より木炭片が混在しており、放射性炭素測定の結果、 $18,250 \pm 650$  Y. B. Pという数値が得られている。このように現在、沖縄県では旧石器時代に概当する絶対年代を得た遺跡があるが、石器は山下町第1 洞穴を除いて出土していない。しかし、本遺跡と比較すると絶対年代等の類似点があり、今後さらに検討を加え資料が増加していくことを望みたい。

#### 縄文時代

第Ⅱ層下部より磨製石斧2点、打製石鏃1点、土器片10数点が出土した。土器片は小片の為、時期等比較することが出来なかったが、第Ⅱ層下部にアカホヤ火山灰が検出されており、この時期に極めて近いものと考えられる。

石鏃はチャートを石材にしたよく整形されたものである。現在、奄美諸島では、笠利町ケジ遺跡<sup>17)</sup>、龍郷町手広遺跡<sup>18)</sup>、瀬戸内町安脚場遺跡<sup>19)</sup>しか出土してなく、本遺跡で4ヶ所である。

また、畑地の土手から兼久式土器が採集されたが、包含層は削平され検出出来なかった。しかし、旧石器時代、縄文時代の包含層は調査地周辺にのびるものと考えられる。

今回の調査は道路建設予定地内の限られた範囲であるため、遺跡の全様を明らかにすることは出来なかったが、奄美諸島での初めての旧石器時代遺物の発見、AT火山灰、アカホヤ火山灰などの広域テラフとの関係等、貴重な資料、問題点を提起したものであった。

#### (註)

- 1) 火山ガラスの屈折率は群馬大学新井房夫教授の測定による。
- 2) 放射性炭素測定については京都産業大学山田治教授の鑑定である。
- 3) 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡第一次調査報告書」 考古学集刊3-4 1967  
池水寛治「出水市上場遺跡」 日本考古学年報24 1973  
池水寛治「上場遺跡」 日本考古学年報28 1977
- 4) 熊本県教育委員会『下城Ⅰ』 熊本県文化財調査報告書37 1979  
熊本県教育委員会『下城Ⅱ』 熊本県文化財調査報告書50 1980
- 5) 熊本県教育委員会『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告書90 1987
- 6) 鈴木遺跡刊行会『鈴木遺跡Ⅰ』 1978  
鈴木遺跡刊行会『鈴木遺跡Ⅱ』 1980  
鈴木遺跡刊行会『鈴木遺跡Ⅲ』 1980  
鈴木遺跡刊行会『鈴木遺跡Ⅳ』 1981  
鈴木遺跡刊行会『鈴木遺跡Ⅴ』 1984



- 7) 高井戸東遺跡調査会『高井戸東遺跡』 1977
- 8) 古内茂『三里塚—新東京国際空港用地内における考古学的調査』 1971
- 9) 庄和町風早遺跡調査会『風早遺跡』 1979
- 10) 杉原荘介『岩宿遺跡』 1956
- 11) 小田静夫「日本最古の磨製石斧」 どんめん11
- 12) Shigeyasu Tokunaga, "Bone Artifacts Used by Ancient Man in the Riukyu Islands" Proc, Imp, Acad Vol, 12 No. 10 1936
- 13) 高宮廣衛・玉城盛勝・金武正紀「山下町洞穴出土の人工遺物」 人類学雑誌83巻2 1975
- 14) 伊江村教育委員会『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第一次概報—』 1977  
伊江村教育委員会『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第二次概報—』 1978
- 15) 渡辺直径「沖縄における洪積世人類化石の新発見」 人類科学23 1971
- 16) 嵩元政秀・呉屋義勝「宜野湾市・普天満宮洞穴遺跡B地点の発掘調査概報」 1985
- 17) 鹿児島県教育委員会『ケジⅠ・Ⅲ遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38 1986
- 18) 龍郷町教育委員会『手広遺跡』 1984
- 19) 笠利町歴史資料館中山清美氏教示



函

版



遺跡遠景（南から望む）



調査風景（C-2区）



確認調査風景



確認調査(13トレンチ)



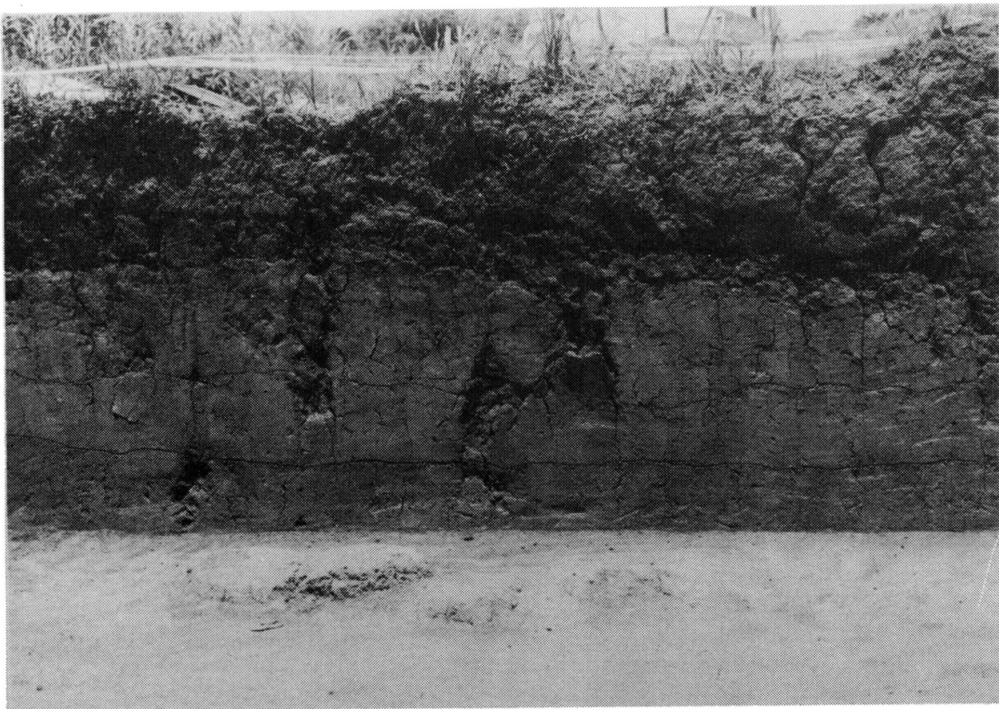
A 地点 全 景



A 地点 調 査 風 景



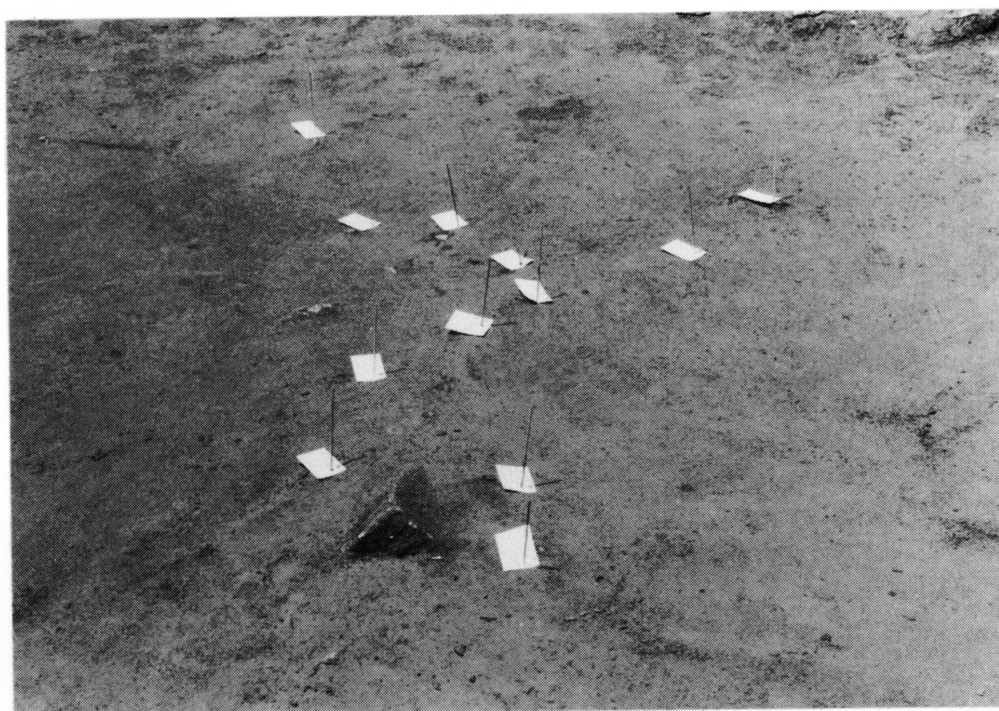
土 層 (A地点C-3・4区 北側断面)



土 層 (A地点C-3区 東側断面)



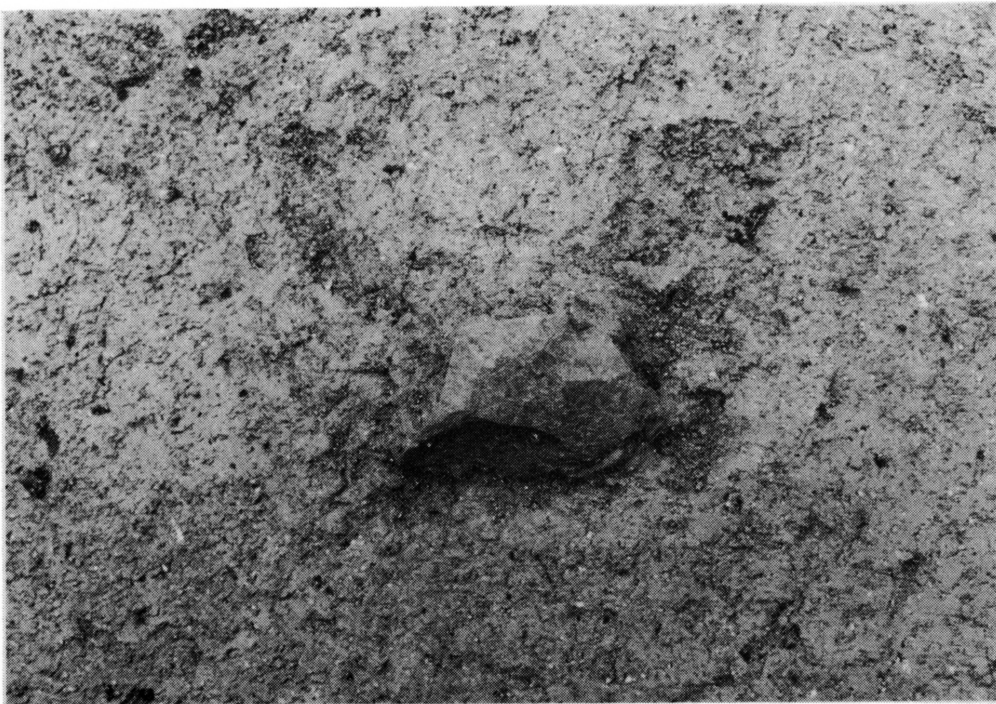
A 地点 III c 層遺物出土状況



A 地点 III c 層遺物出土状況



A 地点 III c 層遺物出土狀況 (No.7)



A 地点 III c 層遺物出土狀況 (No.14)

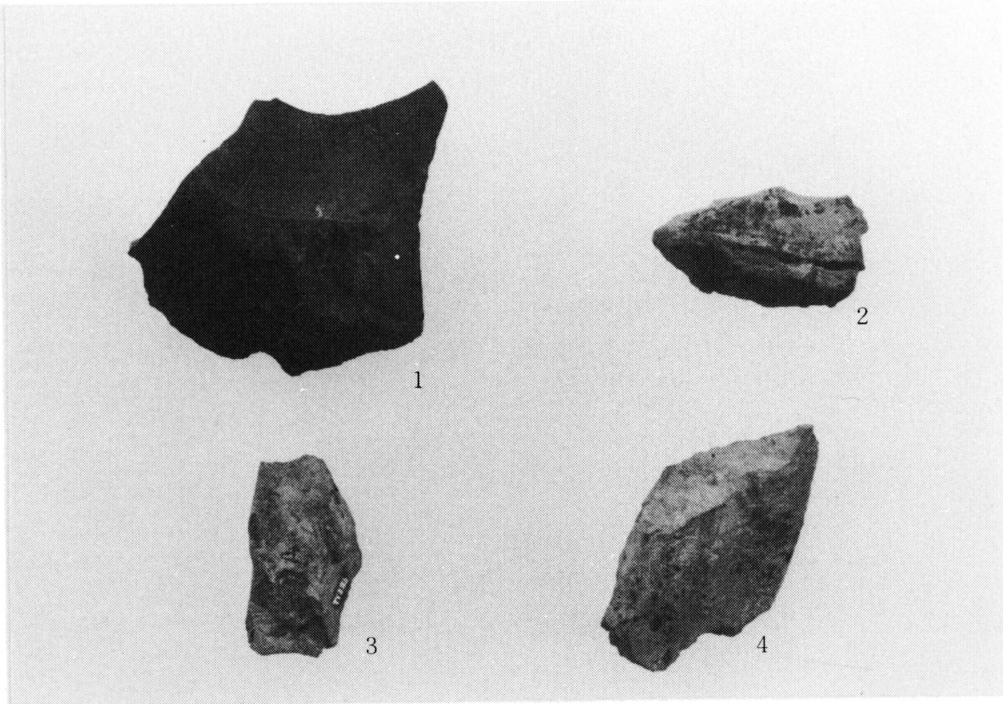




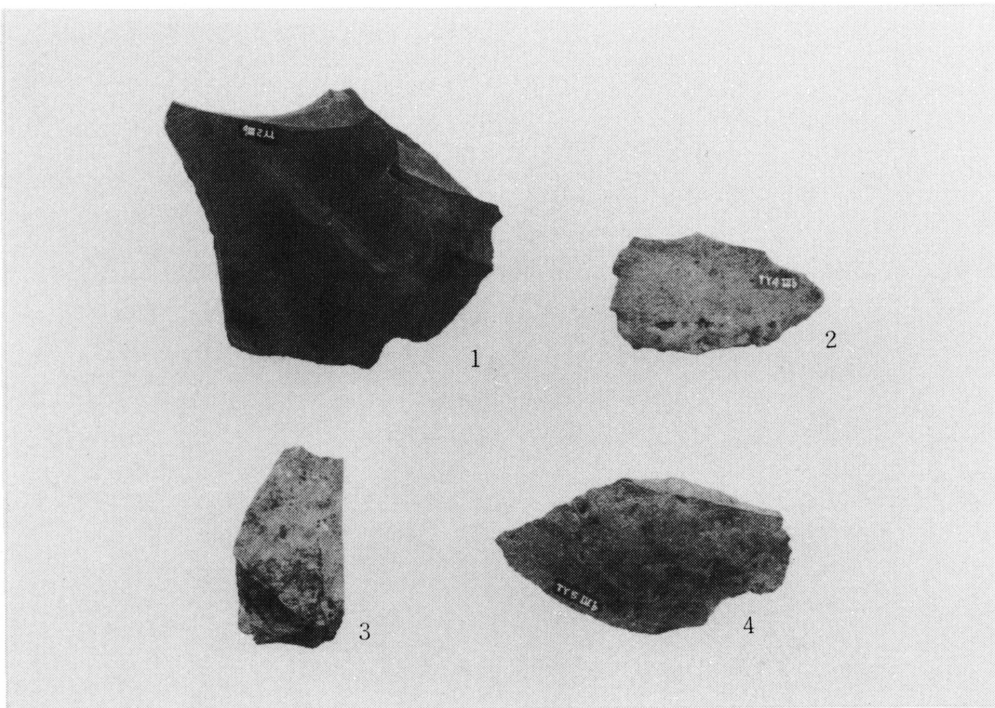
A 地点 III c 層遺物出土狀況 (No.10)



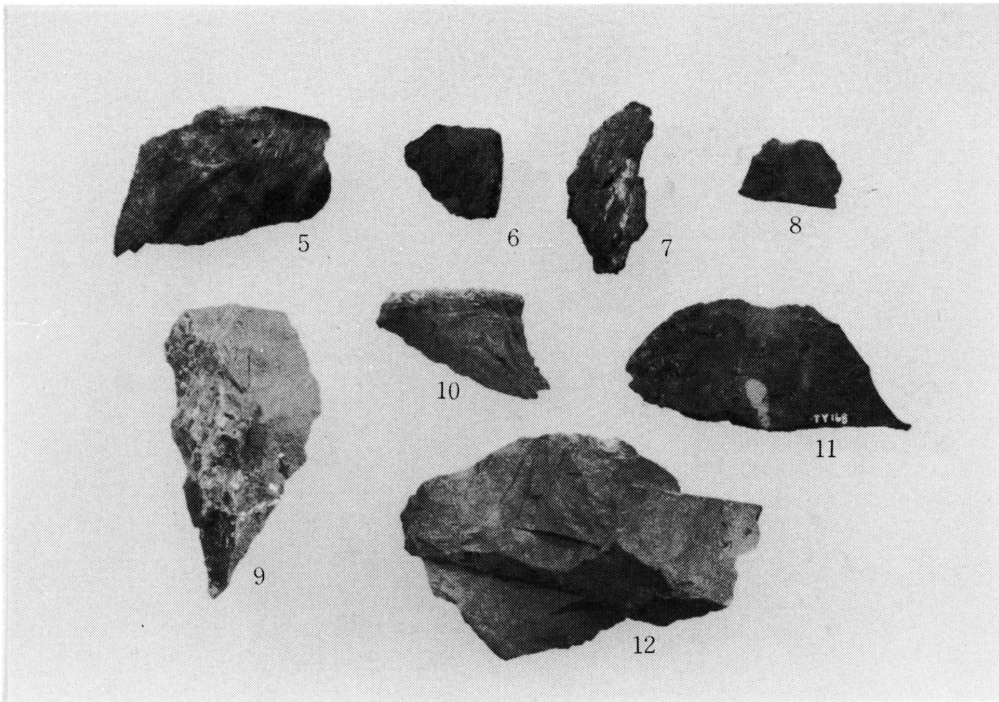
A 地点 III c 層遺物出土狀況 (No.13)



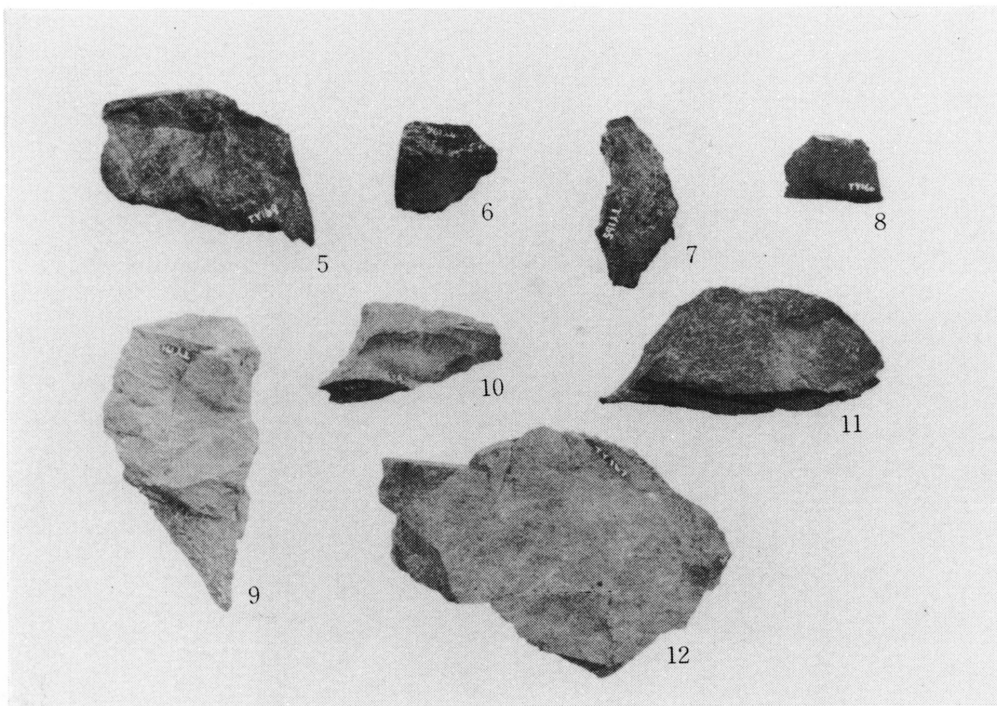
A 地点 III b 層出土石器



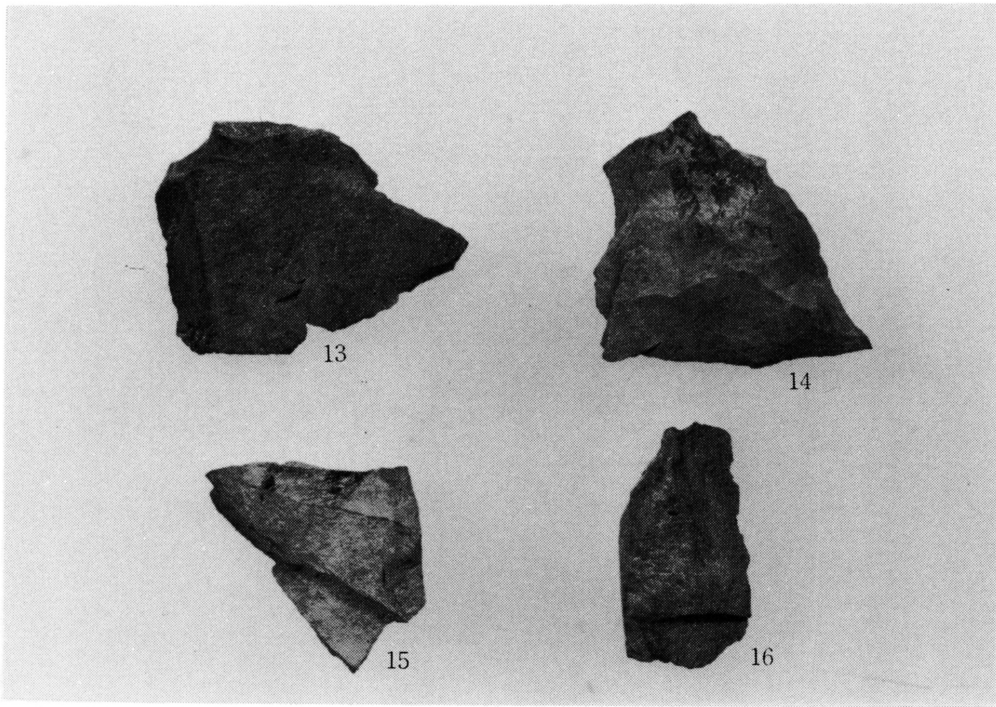
同 上 (裏)



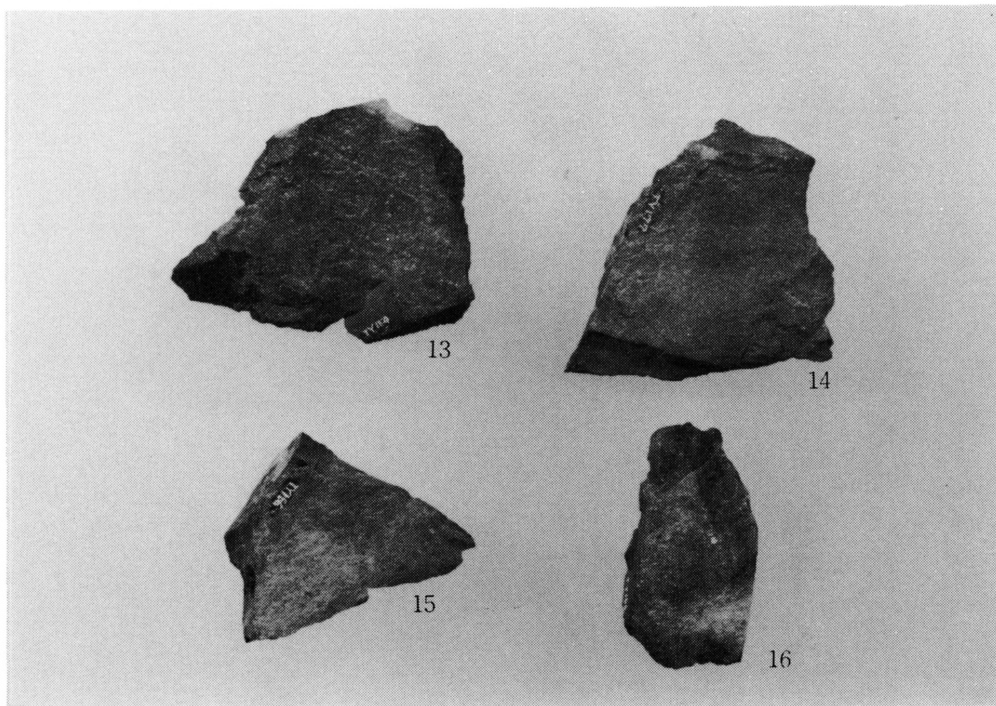
A 地点 IIIc 層出土石器



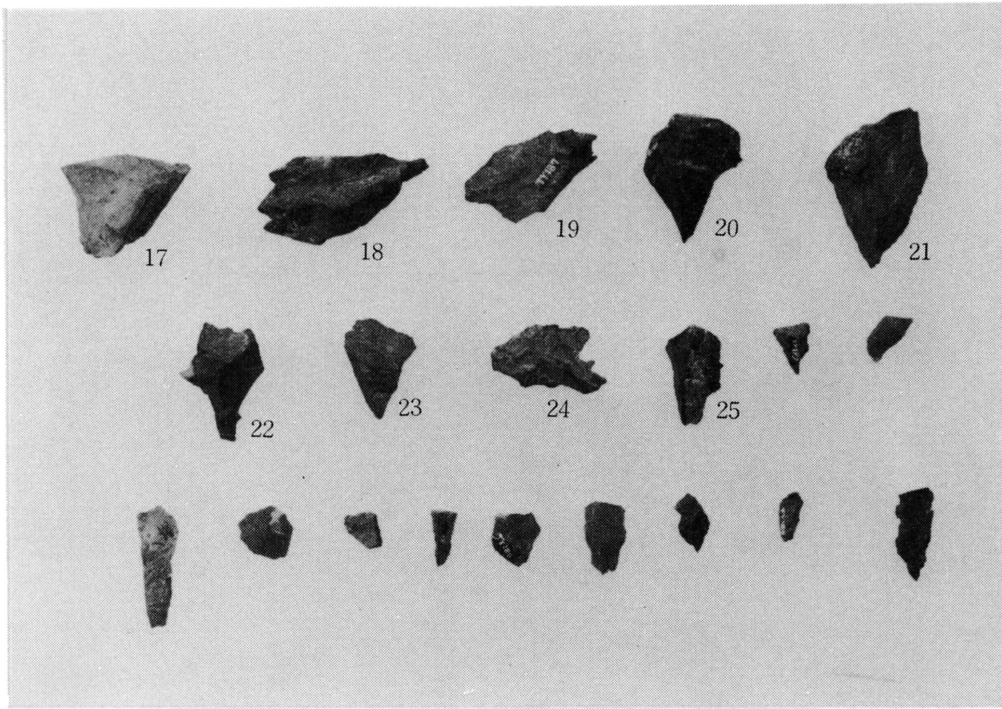
同 上 (裏)



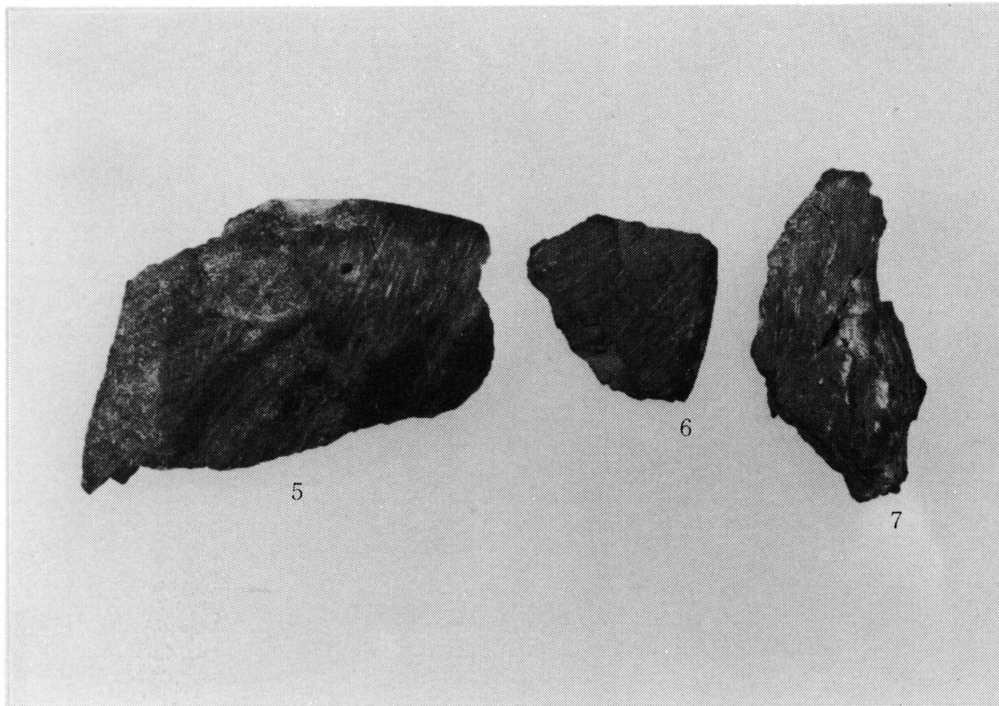
A 地点 IIIc 層出土石器



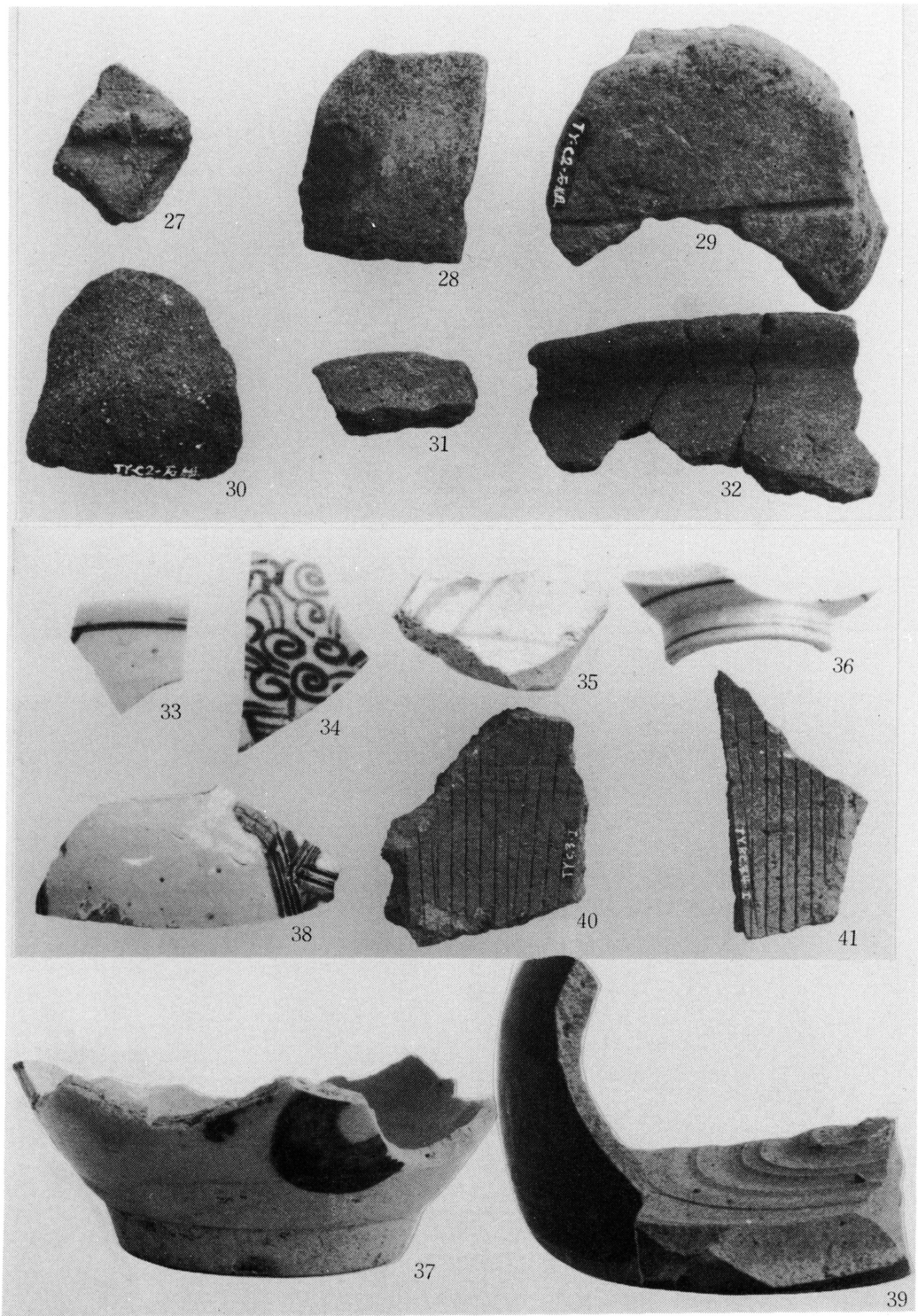
同 上 (裏)



A 地点 IIIc 層出土石器



磨製石器 (拡大)



A 地点 表層 出土 の 遺物



B地点調査風景



土層（B地点C-13区 北側断面）



土 層 (B地点C-13区 東側断面)



B 地点 II 層土器出土狀況

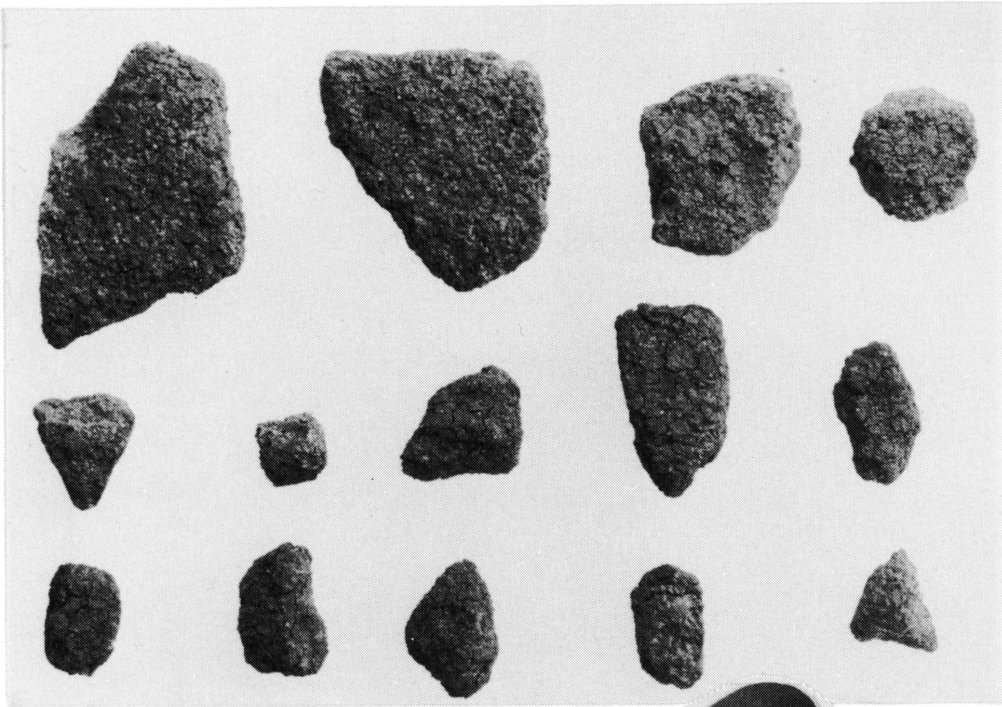




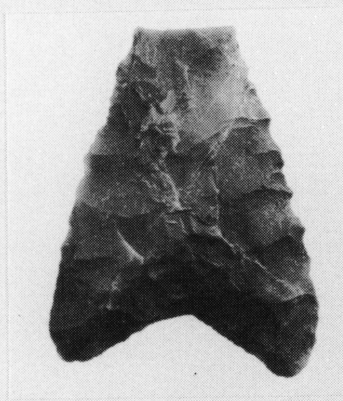
B 地点 II 層石器出土狀況 (打製石鏃)



B 地点 II 層石器出土狀況 (磨製石斧)



B 地点 II 層出土土器

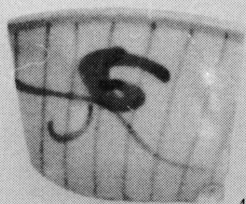


43

B 地点 II 層出土石器



44



45



46

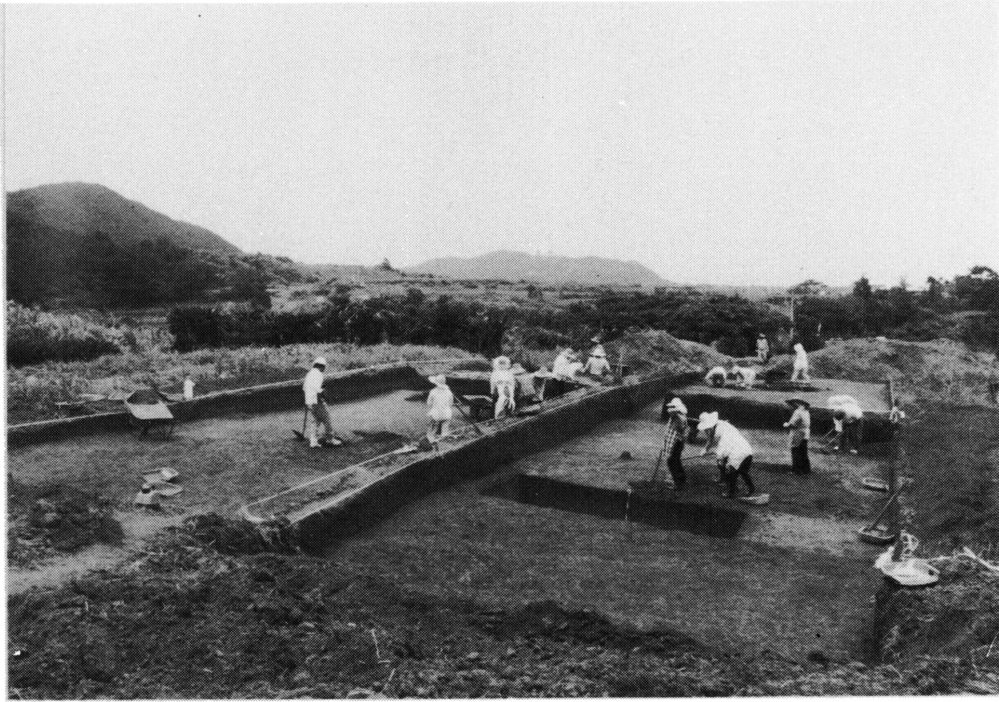


47

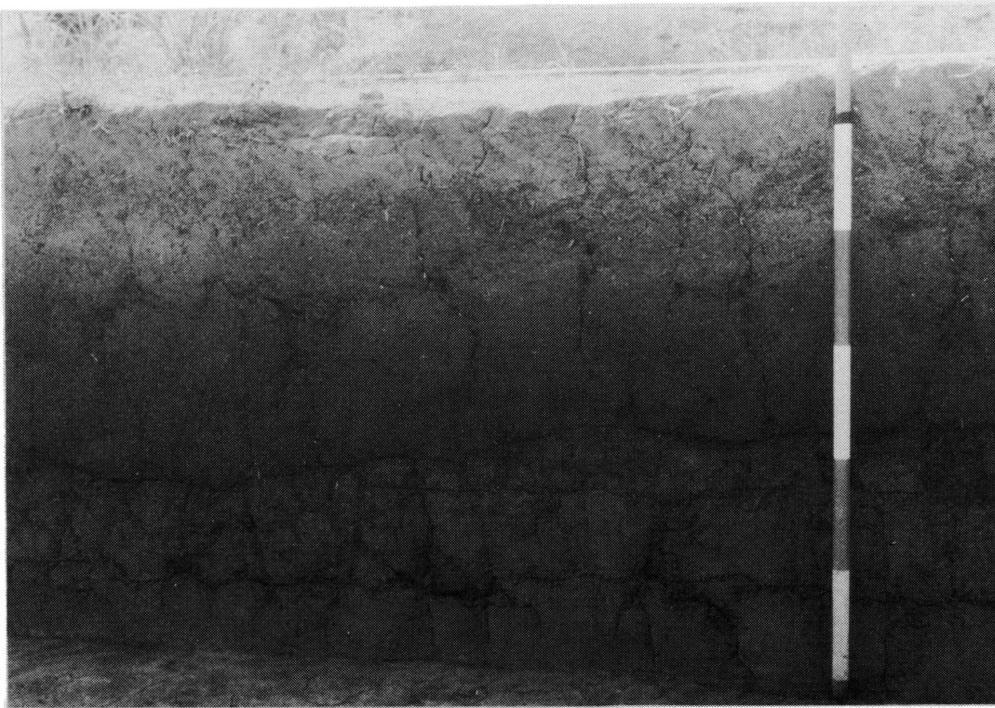


48

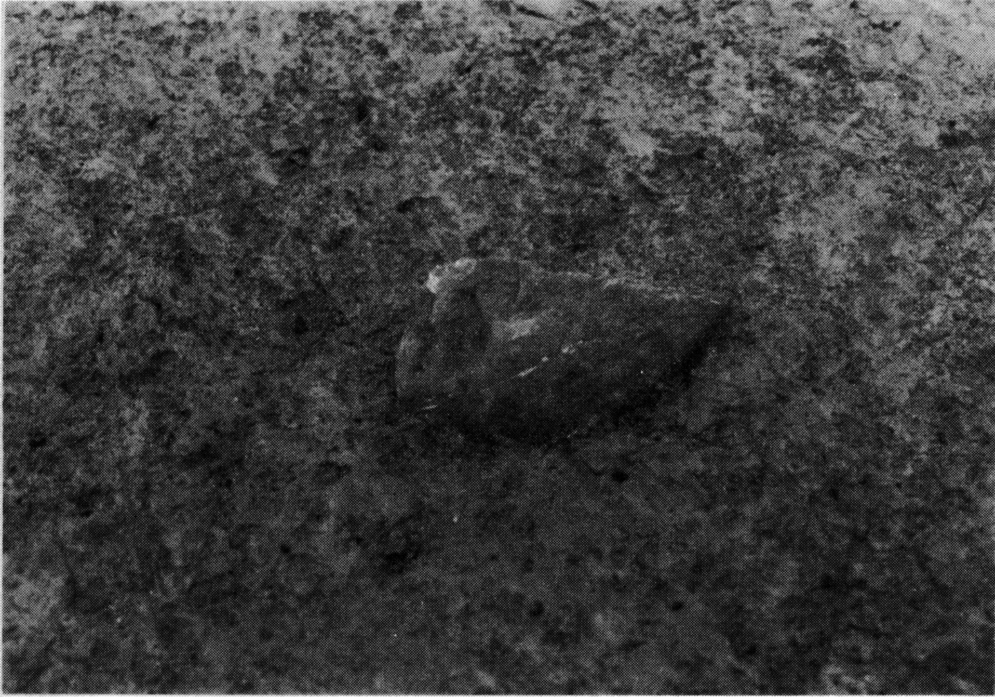
B 地点 表層出土の遺物



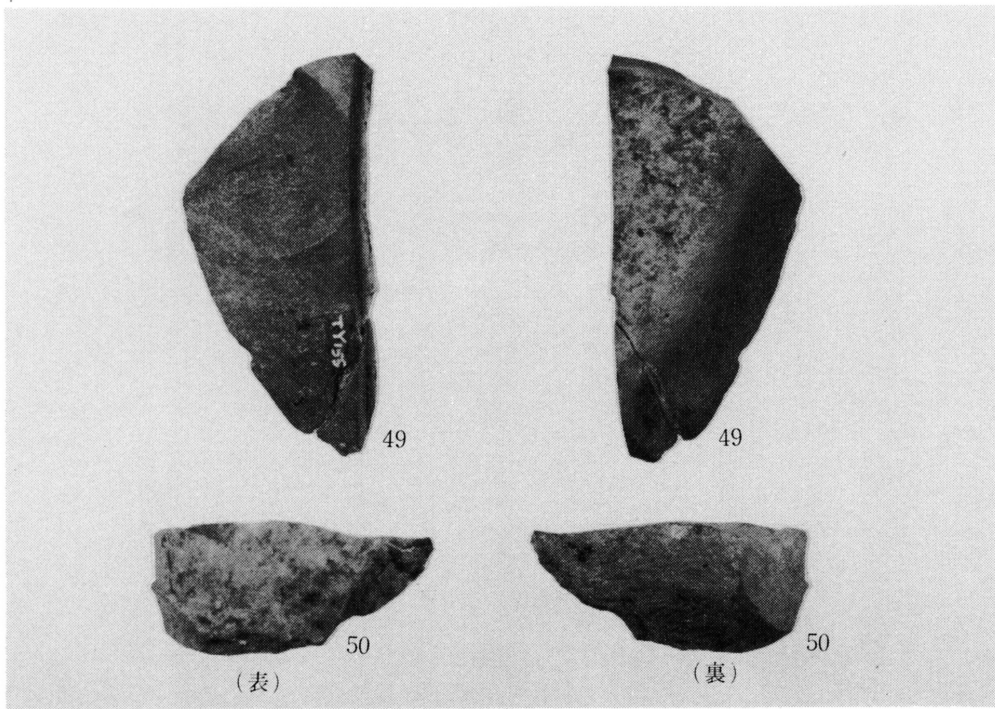
C 地点 調査風景



土層 (C地点 C-17区 東側断面)



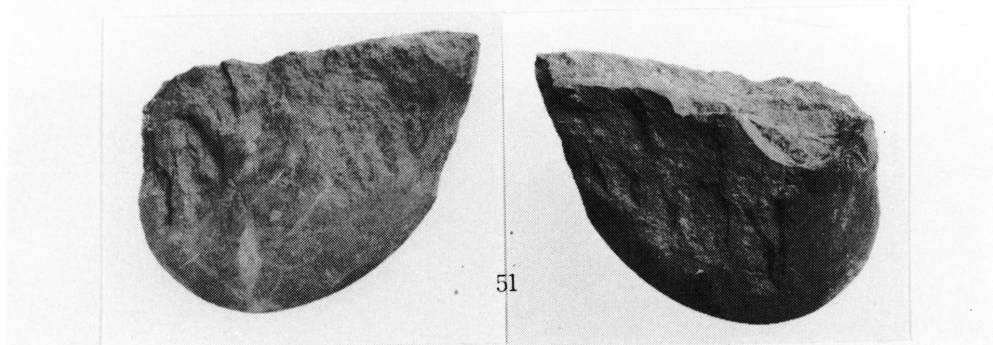
C 地点 II 層 石器 出土 状况 (磨製石斧)



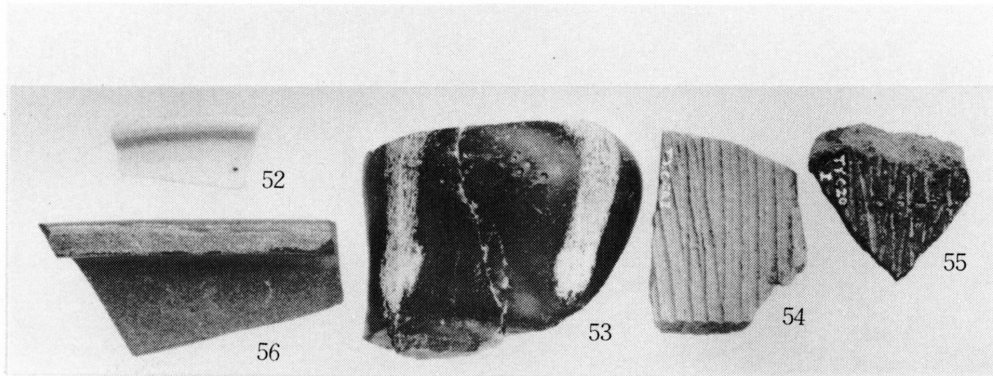
C 地点 III b 層 出土 石器 (裏)



C 地点 II 層出土土器 (拡大)



C 地点 II 層出土石器



C 地点表層出土の遺物



節田小学校児童体験学習



調査メンバー

## 第 7 章 土浜ヤーヤ遺跡の地層について

鹿児島市立玉龍高等学校教諭 成尾 英仁

### 1. 地 形

#### (1) 地形概略

土浜ヤーヤ遺跡のある鹿児島県大島郡笠利町は、奄美諸島中最大の島である大島本島の最北部に位置している。大島本島は面積709km<sup>2</sup>であり日本でも有数の島であるが、全体に中～南部は険しい山岳地帯となっており、標高200～500mの開析された山地が連なっている。山は海岸部からそのまま急斜面となって山頂まで続いているため、平地はほとんどなく耕地といえる場所は川沿いのごくわずかである。これに対し北部は比較的平坦であり、海岸部には段丘地形が発達している。この顕著な二つの地形は、笠利町と竜郷町との境界付近にある、幅約700mの赤尾木地峡によって分けることができる。

海岸段丘は遅沢(1985)らにより、I～Vの大きく5段に分けられているが、現在は耕地整理により段丘崖部分が削りとられており、段丘地形は不明瞭となっている。これらの5段の段丘は一般に笠利半島東側で発達しており、西の東シナ海側ではほとんど見られない。

#### (2) 遺跡周辺の地形

遺跡のある笠利町は笠利半島の大半を占めているが、町の東側海岸は比較的滑らかな海岸線であり、西側は複雑に入りくんだ海岸線となっている。これらの湾入のうち赤尾木湾はほぼ円形をしており、山口ら(1974)により隕石クレーターとして紹介されたが、それに対して重力異常の測定データからの反論も出されている。

東海岸側に見られる段丘は、節田からアヤマル岬までの間で特によく発達しているが、中央部の宇宿付近では標高40～50mの段丘面と、標高20m前後の段丘面が広がっている。段丘面は全体に海岸側に向かって緩く傾斜し、後者の段丘は宇宿集落方向に向かって低くなっている。

この東海岸には砂丘がよく発達しており、特に和野から土盛にかけては、海岸線に平行に幅最大500m位・高さ20m位の砂丘が連なっている。これらの砂丘は形成時期により旧砂丘・新砂丘(井関1975)の二つに区分することができる。

土浜遺跡は笠利町最南部に位置しているが、この付近は段丘地形の最末端部に相当している。ここから西部にかけては平坦な段丘地形はほとんど発達せず、山地が直接海岸部に迫ってきており、特に用安と土浜との間は顕著となっている。

土浜遺跡付近の地形は図-1に示される通りであり、大きく山地・段丘・砂丘の三つに区分することができる。遺跡のすぐ東側を後川という小川が流れているが、長さ約700m程度でありながら標高100m近くから流下してくるため、川の流量はそれ程多くないが下刻作用が強く、遺跡付近では深さ10m前後の谷をつくっている。このためこの付近では水が得にくく、川の途中に数箇所のダムがつくられている。

遺跡付近の山地は図-2にあるように標高は低いが比較的急峻であり、平地の段丘面からすぐに急斜面となっている。遺跡周辺の山の尾根は、南の明神崎から北の崎原までほぼ南北に連っており、その高さも150m前後でほぼ一定している。これはこの山塊をつくる地層が概略南北に並んでいるためである。

遺跡内の細かい地形は図-2のようであり、遺跡は後背地の山の急斜面下に発達した比較的なだらかな裾野に立地している。遺跡のすぐ裏側には、本島内での数少ない石灰岩洞穴の一つであるヤーヤ洞穴があり、ここからはいわゆる爪形文土器が出土している。ヤーヤ洞穴は間口・高さ・深さとも数m程度の小規模なものであり、現在は落石により天井部の大部分はなくなっている。洞穴をつくる石灰岩は黒色かつ緻密で、遺跡周辺ではこの洞穴一帯にごくわずかに分布しているにすぎない。

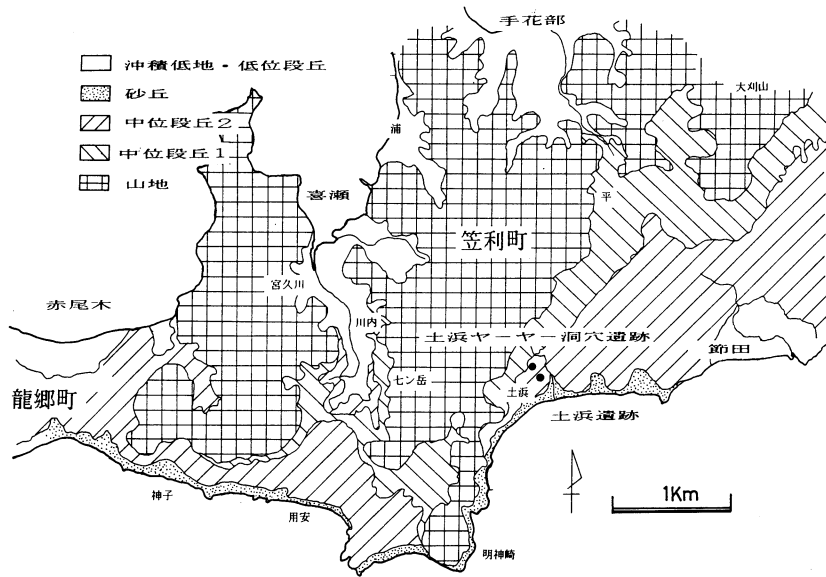


図-1 土浜ヤーヤ遺跡付近の地形区分

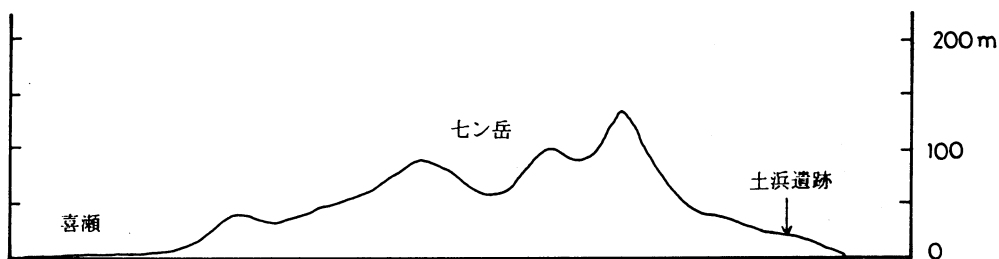


図-2 土浜ヤーヤ遺跡付近の地形断面図



## 2. 地 質

### (1) 地質概略

奄美大島の地質については、1900年代初期のYoshiwara, Hanzawaの研究を初めとして、多くの研究がある。それに従えば奄美大島の地質の概略は次のようである。

古くはHanzawa (1935)らにより、奄美大島に分布する堆積岩は古生代のもものとされてきたが、その後石川・山口 (1965)により大勝頁岩層からアンモナイト化石が発見され、またIshida (1969)は和野層からカヘイ石を発見し、さらにIshibashi (1969)は名音層中の石灰岩中からフズリナ化石を発見し、奄美大島の地質が複雑であることがわかってきた。

奄美大島に分布する地層は、下部から湯湾層・名瀬層・大棚層・大勝層・和野層に分類されており (波多江ほか1959), 始新統に属する和野層を除く4つの地層はジュラ系～白亜系とされている (Osozawa, 1984ほか)。

これらの地層はいずれもほぼ北東～南西の走向をもち、北西側へ中程度の傾斜をしており、島の東側から西側に向かって、名瀬層・和野層・名瀬層・大勝層・名瀬層・大棚層・湯湾層の順に堆積している。

最近の知見によれば、奄美大島の堆積岩の大部分は、重力滑動や崩壊によって形成されたと考えられている (遅沢, 1983ほか)。

例えば南部大島に分布する湯湾層は、かなりの部分で大小様々の異地性岩体を含んでいることが指摘されている。

各地層を構成する堆積岩は、砂岩・頁岩が主体であり、これらに伴って塩基性岩類やチャート・石灰岩が分布している。

また名瀬層と大棚層には、カコウ岩類が走向にほぼ平行に貫入している。これらの諸岩体の絶対年代は三点測定されているが、それによれば $49 \pm 6, 56 \pm 3, 54 \pm 3$ Maであり、新生代新第三紀始新世に相当している (Shibata & Nozawa, 1966)。

奄美大島における第四系の分布はごく狭く、しかもその厚さは薄い。第四系が発達するのは北部の笠利半島であり、ここでは琉球層群に属する砂礫層・石灰岩、および完新世の海浜堆積物などが見られ、一部に貝化石などがある。

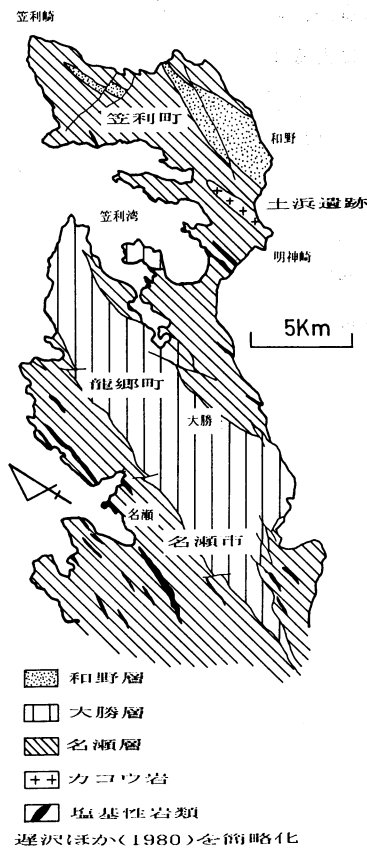


図-3 奄美大島北部の地質図

(2) 遺跡周辺の地質

図-3 に示されるように遺跡周辺に分布する主要な地層は、名瀬層とそれに貫入したカコウ岩であり、他にごく小範囲に第四系の琉球石灰岩・砂礫層が見られる。この付近に見られる名瀬層は主に黒色の頁岩であるが、どの部分でも風化が著しく、しかもカコウ岩の貫入による変成作用を受けているため変質が著しい。遺跡北～西部ではカコウ岩と頁岩の接触部が見られるが、ここでは地層の変形と変質が著しい。カコウ岩は遺跡西側にある山体をつくっているが、かなりの部分で風化しいわゆるマサ土となっている。

カコウ岩は新鮮な場所では白色を呈し、柱状節理が発達している。岩石をつくる鉱物粒は小さく、一見カコウハン岩状を呈している場所もある。山体の裾野ではカコウ岩は崖錐堆積物となって、厚さ10～20mで堆積している。カコウ岩礫の大きさは1mに達するものもある。

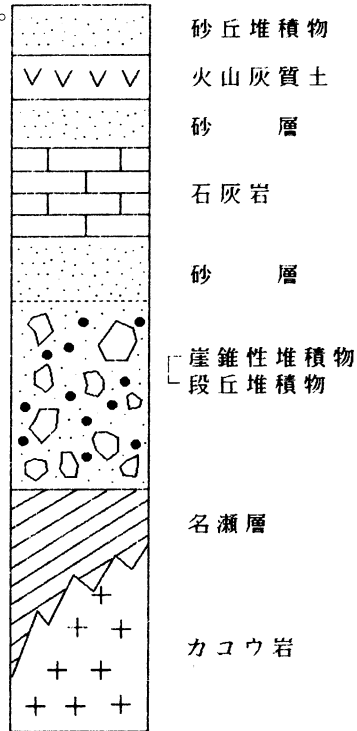
遺跡北西のヤーヤ洞穴付近では、琉球層群に対比される砂礫層・石灰岩層が見られる。これらの地層は段丘堆積物と考えられるが、いずれも薄い地層で連続性も良くない。

図-4にあるように、下位からカコウ岩礫を含む砂礫層、細～中粒赤色砂層、石灰岩、砂層となっている。赤色砂層は風化し一部粘土化しているが、新鮮な部分では黄白色で石灰岩塊を含んでおり、海性堆積物と考えられる。石灰岩はヤーヤ洞穴のあるごく狭い範囲にしか認められず、他地域との連続性はほとんどよくない。同様の石灰岩は笠利北東海岸で見られる。石灰岩は下位の砂礫層から連続して堆積しており、主にサンゴ・石灰藻からなり他に有孔虫化石も認められる。石灰岩の上面は風化し、暗赤色を呈する粘土となっている。

石灰岩の上の砂層は白色細粒で、陸産の貝化石を含んでおり風成層と考えられる。

なお山地においては、風成砂層を除くすべての地層をおおって、未固結の泥状の灰白色の堆積物が見られる。厚さはどの地点でもほぼ一定で約30cmである。

笠利半島東海岸には砂丘がよく発達しているが、土浜付近はその末端部に相当しあまり堆積状況はよくない。砂は主に有孔虫殻からなり、他にサンゴ片・石灰藻片などを含んでおり、下部はやや固くなっているが大半は未固結である。砂丘はほぼ海岸線に平行にのびているが土浜付近では幅は狭く最大約100mであり、高さも約20mと低い。遺跡北側の後川沿いの集落内では砂丘の断面がみられるが、そこでは粗粒の砂が基盤の名瀬層の頁岩の上ののり、弱く成層しているのが観察できる。なお砂層には点々と軽石がはいっている。



名瀬層とその上の段丘堆積物との境界は不整合の関係である

図-4 模式地質柱状図

### 3. 遺跡の地層

#### (1) 堆積物の特徴

遺跡内の地層は図-5 のようであり、大きくVI層に区分することができる。各層はほぼ安定した堆積状況を示しているが、尾根の部分では上位の地層が剝離され、下位の砂の層が露出している。

各層の特徴は以下のようである。

第I層(砂層) やや灰色を帯た中～細粒の砂の層で、海棲の貝の遺骸が多く混在している。砂粒の大部分は有孔虫の殻である。遺跡周辺の標高30m付近まで、厚さは変化しながらも分布している。遺跡内では厚さ約30cm程度であり、一部は二次的な盛り土となっている。未固結砂であるが、やや縮まっている。

第II層(黒褐色土) 色調の違いにより上下2層(a, b)に区分することができる。a層は乾燥すると縦に強いクラックがはいる、きわめて粘質の強い土壌である。部分的に黄橙色をした、親指大の円形の土粒が入っている。これは上下約20cmの幅にわたって分布しているが、大半はa層下部に直線的に断続して堆積している。b層はa層よりやや色調が薄く茶褐色を帯び、クラックのはいりかたも弱い。ここにはオレンジ色をした火山灰様土がある。a層と上の砂層の境界はシャープで明瞭であるが、b層と下の層との境界は不鮮明である。

第III層(黄色土) 色調の違いにより3層(a, b, c)に区分することができる。第II層にくらべて粘質が弱く、クラックはほとんどはらない。a層は明るい黄色で粘質は弱く、比較的サラサラしており、下のb層とは漸移している。b層はややくすんだ黄色をしており、層の中央部付近には長石の風化したような白色の小粒が点在している。またb層の下部には長さ1～2cm大の薄茶色をした風化砂岩の岩片がわずかに点在している。c層はa層に似た明るい黄色を呈しており、上の地層と漸移している。

場所によっては第III層中に、炭化木片が含まれている。

第IV層(赤色土) 濃い赤色を呈しており、風化が著しく粘質が強い。第IV層をつくっているものは、粗粒の砂とこれを埋めるような形ではいつている粘土であるが、その量比は場所によって変化する。本層は奄美地方で「マージ」と称される粘質土に相当する。

第V層(砂層) 場所によって粒径や風化度・色調、砂と粘土の量比などは変化するが、基本的にはカコウ岩の風化したマサ土である。背後の山地をつくるカコウ岩は裾野で崖錐性堆積物を多量に作り出しているが、そこから離れるにしたがい岩片が小さくなり、遠方では砂粒・粘土のみとなっている。遺跡内の新鮮なマサ土は一見すると砂丘堆積物様で、粘質もなくサラサラしている。逆に粘土の多い部分もあり、そこでは長石は風化し、にごった白色の点となって浮き上がっている。

第VI層（基盤岩） 風化した頁岩や千枚岩化した岩石・カコウ岩からなり、遺跡北端の後川の崖に露出している。

頁岩はカコウ岩の貫入によるかく乱を受け、走向・傾斜は大きく変化しており、また弱いながらも鉱化作用を受けている。全体にもろく崩れやすくなっている。

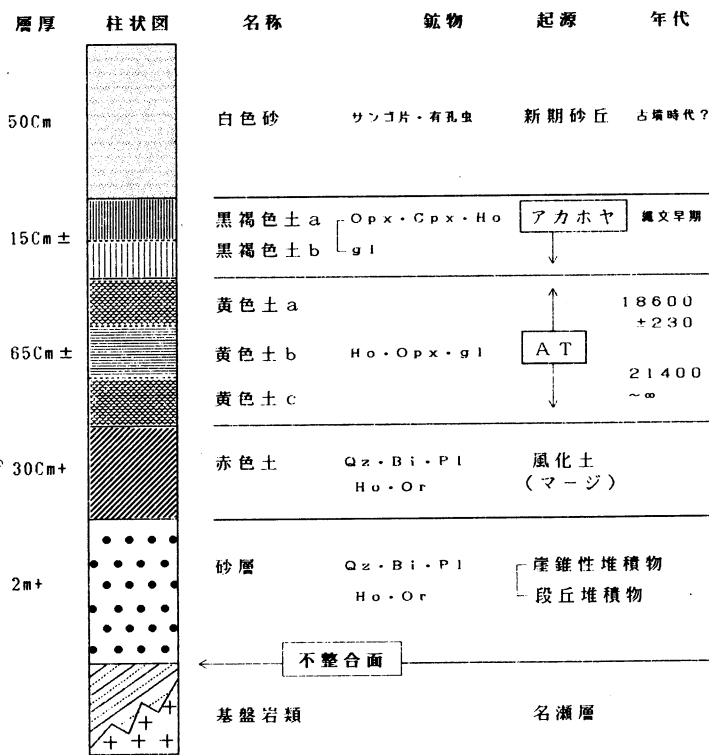
(2) 堆積物中の鉱物組成

前述のように遺跡内の堆積物は基盤岩までVI層に区分されるが、そのうち第II・III層には火山起源の堆積物が挟在している。

野外における肉眼観察では、堆積物内の火山噴出物は上下2枚識別することができ、それぞれバブル・ウォール型火山ガラスを含んでいる。

本層中の火山噴出物の鉱物組成と火山ガラスの屈折率を示せば以下のようである（火山ガラスの屈折率は群馬大学新井房夫教授の測定による）。

表-1にあるように第II・III層の鉱物組成には、カクセン石が特徴的に含まれている。このカクセン石は自形結晶をしており、その量比は他の鉱物にくらべてわりあいに多い。鉱物の大きさは平均0.5mm程度である。他の鉱物としてはopx（斜方輝石）cpx（単斜輝石）がある。火山ガラスは第II・III層に拡散して分布しており、しかも風化が著しく粘土化しているため、野外における識別はやや困難である。



遺跡内の地層はI層からVIまで区分される。

- I：白色砂層 II：黒褐色土 III：黄色土 IV：赤色土
- V：赤色土 VI：基盤岩

Ho：カクセン石 Cpx：単斜輝石 OpX：斜方輝石 Qz：石英  
Or：セイチョウ石

遺跡内のトレチによって、わずかではあるが地層の構成が異なったり、厚さが異なっている。特に砂層は場所による変化が大きく、マサ土様のものから砂丘砂様のものまでである。マサ土様のものは粒子が荒く、石英粒が目立ちルーズである。II層とIII層の厚さはほぼ一定であるが、低所では厚くなっている。

図-5 遺跡内堆積物の層序表

土浜ヤーヤー遺跡の火山ガラス

サンプル	最大粒径	鉱物組成	タイプ	屈折率
2層黒色土	0.7 mm	gr. ho, opx cpx	bw-bj ++	☆ 1.498-1.511
2層黒色土中 オレンジ土	0.6	gr. ho, opx	bw-bj ++	☆ 1.499-1.512
3層 a	0.5	gr. ho, opx	bw-bj +	★ 1.498-1.509
3層 b	0.6	gr. ho, opx	bw-bj +	★ 1.498-1.500
3層 c	0.5	gr. ho, opx	bj-bw +	★ 1.496-1.501

- ☆ K-A1に対比可能である  
少量のATをまじえる
- ★ ATに対比可能である ごく  
少量のK-A1をまじえる

新井房夫氏による

gr. ho: 緑色カクセン石  
opx: 斜方輝石 cpx: 単斜輝石

表-1 土浜遺跡の火山ガラス

表-1にあるように火山ガラスの大きさは0.5~0.7mm程度であり、第II層に比較的多く含まれており、第III層には少ない。火山ガラスは色の無い無色のものと、褐色~灰色・青白色の2種類ある。また火山ガラスのタイプもバブル・ウォール型のものと、バブル・ジャンクション型とがある。

第II層の黒色土と、その中に点在するオレンジ色の堆積物の両方に、火山ガラスが認められるが、それらの火山ガラスの屈折率は1.498~1.512と幅が広く、また火山ガラスの色調・形態などから、起源の異なる2種類のもものが混在していることがわかる。量比で見ると比較的屈折率の高いものが多く、また中央値で見ても1.506~1.512であり、比較的屈折率が高い。

第III層a, b層には、火山ガラスはごくまれにしか含まれていないが、c層にはわりと多く含まれている。

火山ガラスの屈折率はa層中のものが1.498~1.509, b層中のものが1.498~1.500, c層中のものが1.496~1.501である。このうちc層中の中央値は1.497~1.498で、比較的屈折率が低い。上のa層の火山ガラスは屈折率の幅が広く、また色調・形態などから起源の異なる2種類のもものが混在していることがわかる。しかしb, c層中のものは屈折率の幅が狭く、一つの火山に由来するものと思われる。

#### 4. 火山噴出物の起源

土浜遺跡の第Ⅱ・Ⅲ層には火山ガラスが含まれているが、このガラスはバブル・ウォール型であり、しかも細粒で風化が進んでいることから、遠方の火山に由来するものと考えられる。

バブル・ウォール型の火山ガラスは、大規模な火砕流噴火に伴ってもたらされるとされている(町田・新井1976ほか)が、南九州にはこのような火山ガラスを噴出した大規模火砕流堆積物が何層か知られている。そのうち最も表層に近い大規模なものは幸屋火砕流堆積物(アカホヤ)であり、さらにその下位に入戸火砕流堆積物(シラス)・阿多火砕流堆積物が続いている。幸屋火砕流堆積物の年代はおおよそ6,300年前であり、入戸火砕流堆積物のそれはおおよそ22,000年前である(町田・新井, 1983ほか)。このことから幸屋火砕流堆積物は、縄文時代早期を示す重要なテフラであり、入戸火砕流堆積物は旧石器時代を示す重要なテフラであるといえる。

ところでこれらの火砕流堆積物は、いわゆる co-ignimbrite ash を伴っており、この火山灰は本体と同様の火山ガラスを含んでいる。このうち幸屋火砕流堆積物に伴うものは、鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah火山灰)であり、入戸火砕流堆積物に伴うものは始良-丹沢火山灰(AT火山灰)である。

この二つの火山灰は超広域分布をすることが知られている(町田・新井, 1983)が、琉球列島の北部~中部の島々でも分布が確認され(成尾未発表資料)、さらに奄美近海の海底でも堆積が確認されている。

K-Ah火山灰の平均屈折率は1.500~1.514(中央値1.510~1.511)、AT火山灰の平均屈折率は1.500±で、

K-Ahのそれより低い。

土浜遺跡の火山ガラスの屈折率から判断すると、高屈折率のガラスはK-Ah火山灰のものに近く、低屈折率のガラスはAT火山灰のものに近く、それぞれに対比することが可能である。

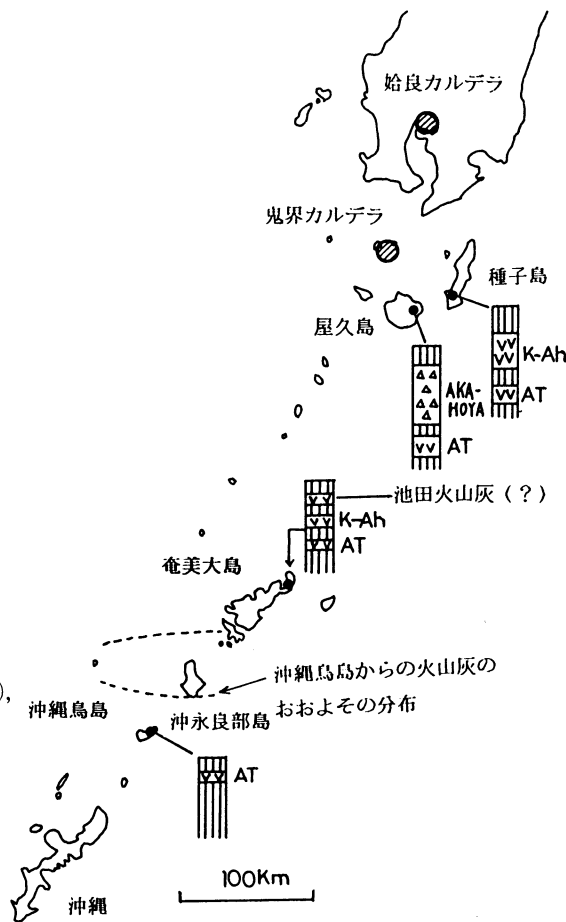


図-6 琉球列島における広域火山灰の堆積

このことは、琉球列島北部でバブル・ウォール型ガラスを含む火山灰層は、どの島でも表層から下位に向かって、K-A h 火山灰・A T 火山灰の順となっている、という露頭観察結果からも支持される。また下位の高屈折率の火山ガラスがA T 火山灰のものであることは、この火山ガラスを含んでいた第Ⅲ層から得られた炭化木片の年代が、 $18,600 \pm 230$  (K S U 1570),  $21,400 \sim \infty$  (K S U 1571) である(鹿児島県教育委員会, 1988) ことからいえる。

ところで、いずれの火山灰層にもカクセン石が含まれるが、これと同様のカクセン石が土浜北部の平地区で、K-A h 火山灰の上位にある火山灰様堆積層に多量に含まれている。土浜遺跡ではこれに相当する層のカクセク石が、下位の層まで拡散して混入したものと思われる。

このカクセン石を含む火山灰様堆積層は、K-A h 火山灰層より新しいが、鹿児島県本土において、この時期に相当するカクセン石を含む火山噴出物は、池田火山起源のものしかなく、それが奄美まで達している可能性があるが、北部の種子島・屋久島ではまだ確認されていない。

## 5. まとめと今後の課題

以上のように、奄美大島北部にある笠利町土浜ヤーヤ遺跡の層序は、表層から基盤岩までⅥ層に区分され、そのうち第Ⅱ層と第Ⅲ層は遺物包含層である。

第Ⅱ層には起源の異なる二つの火山ガラスが含まれているが、その大部分は屈折率からK-A h 火山灰に対比される。他の一つは下部の層からの拡散である。第Ⅲ層にも火山ガラスがあるが、屈折率からA T 火山灰に対比される。第Ⅲ層中から採集された炭化木片の絶対年代は、 $18,600 \pm 230$  (K S U 1570)・ $21,400 \sim \infty$  (K S U 1571) であり、これからも第Ⅲ層の火山ガラスはA T 火山灰に対比することができる。

従来奄美諸島では徳之島を除いて、火山噴出物がないものとされていたが、最近他の島でも砂丘中に軽石・スコリアが発見されたり、火山灰が発見されたりしている(成尾, 1986)。

ところで奄美諸島は堆積岩からなる島であり、火山灰を噴出するような火山はないことから、これらの火山噴出物は奄美以外に起源があることになる。

奄美におけるK-A h 火山灰とA T 火山灰の発見は、このような火山噴出物に明確な時間目盛りを入れることを可能にし、考古学的にも遺物の時代決定に大きな影響を与えることになり、この二つの火山灰が確認された意義は大きい。

奄美諸島では海岸部に砂丘が発達しており、その中に多くの遺物が包含されているが、遺物の編年や砂丘の形成時期の決定などに、今回確認された二つの火山灰を利用していくことができる。さらに起源未詳の火山灰、軽石・スコリアの噴出源を確定することや、まだ未発見の火山噴出物の存在を明らかにすることは、奄美諸島の地質や先史時代を理解するためにも、きわめて重要な課題である。

謝辞：土浜ヤーヤ遺跡の調査を行う機会を与えていただいた鹿児島県教育委員会と、現場で指導いただいた鹿児島県考古学会長河口貞徳氏・鹿児島県教育委員会文化課牛ノ浜修氏・旭慶男氏に感謝いたします。

群馬大学教授新井房夫先生には、多忙にもかかわらず火山ガラス屈折率測定を行っていただいた。先生による火山ガラス屈折率測定なしには、本報告はあり得なかった。最後になりましたが、先生のご協力に対し心から感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 遅沢壮一(1985)：奄美大島 琉球列島の地質誌(木崎甲子郎篇) p. 51~60
- Shibata, K. and Nozawa, T. (1966) : K-Ar ages of granites from Amami-Oshima, Ryukyu Islands, Japan. Bull. Surv. Japan, 17, 430-435
- 町田 洋(1977)：火山灰は語る 蒼樹書房 p. 324
- 町田 洋・新井房夫(1976)：広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義 科学 46, 339~347
- 町田 洋(1968)：薩南諸島の地形 薩南諸島の総合的研究 明治書院 p. 20~52
- 町田 洋・新井房夫(1978)：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰 第四紀研究 17, 143~163
- 町田 洋・新井房夫(1983)：広域テフラと考古学 第四紀研究 22, 133~148
- 井関弘太郎(1975)：砂丘形成期分類のためのインデックス 第四紀研究 14, 183~188
- 大塚・ほか(1980)：奄美大島の第四系平層について 琉球列島の地質学的研究 5. 55~62
- 石川秀雄・山口四郎(1965)：奄美大島からのアンモナイトの発見とその意義 地質雑 71. 78~79
- Ishida, S. (1969) : Wano Formation (Eocene) in Amami-Oshima, Ryukyu Island, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan 75. 141~156
- 波多江・ほか(1959)：鹿児島県奄美群島の地質並びに地下資源概観—20万分の1地質図説明書 鹿児島県企画調査室



## あ と が き

野あさがおの咲きほころうらかな春光のなかで開始された発掘調査は、サネン花、ソテツの花に降り注ぐ梅雨に悩まされ、さらにハブも敬遠する炎天下のなかで滝のように流れる汗を拭き拭き着々と進められた。

今回の調査は、奄美最古の遺跡とされているヤーヤ洞穴の隣接地、しかも奄美ではめずらしい赤土「マージ」の発掘ということで「かなり古いものが出るのではないか。」という期待がこめられていたが、予想をはるかに遡る旧石器時代の遺物が出土したときは、一同暑さも忘れるほどの感動を覚えた。

調査にあたり便宜を図って下さった笠利町教育委員会・土浜集落の皆様、そして作業員として御協力いただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた文化課埋蔵文化財収蔵庫の方々に心より感謝申し上げます。

### 発掘作業員

浜田 義満、 土浜 義勝、 振 重光、 土浜 祐男、 土浜 勉、 土浜 君義  
浜田キクエ、 松本智加子、 浜田節子、 浜田 久子、 土浜良子、 大山アサ子  
浜田 勝枝、 牧野美代子、 浜田フジ、 浜田ハル子、 浜崎広子、 楠田セチ子  
野島ナス子、 大山美津代、 栄ミネ子、 花田枝美子、 楠田シズ、 牧野ノブヨ  
当原久美江、 土浜 鏡子、 岡 春江、 舟倉喜代子

### 整理作業員

宮岡 雪子、 行船 順子、 竹下マリ子、 四丸久美子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(47)

主要地方道竜郷・新奄美空港線改良事業に伴う  
埋蔵文化財報告書

土 浜 ヤ ー ヤ 遺 跡

発行日 昭和63年3月31日

発 行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 有限会社 新光印刷 〒892 鹿児島市西田2-1-8

「土浜ヤーヤ遺跡」 正誤表

頁	行	誤	正
11	6	あられるのは	あらわれるのは
13	25	研究室に積極的	研究室は積極的
14	31	鹿児島教育委員会	鹿児島県教育委員会
14	31～35	埋蔵文化財報告書	埋蔵文化財発掘調査報告書
18	11	阿倍克子	阿部克子
20	27	喜志川遺跡	喜子川遺跡